ＳＯＢＡ活動報告書

第１０・１１号

２０１４年３月

愛知教育大学教育学部附属教育臨床総合センター

SOBA とは

SOBA（Symposium of Bullying in Aichi）は、子どもの「そばにいる」ことを活動の姿勢とする、愛知教育大学の学生を主体としたボランティアグループです。愛知県内で相次いだ「いじめ」に関する事件をきっかけに始まった「いじめを考える会」を前身とし、現在は教育臨床総合センターの研究教育活動に、学生主体の活動として位置づけられています。

子どもの「そばにいる」という姿勢を具体化するため、子どもに近い「お姉さん」「お兄さん」の立場から、時には自分たち自身の「子ども」としての体験を振り返りつつ、リアルタイムで子どもが抱える問題について学んでいます。また子どもと関わりを続けるため大学外部の地域との交流を進めています。活動にあたっては、弱い立場に置かれがちな人々の力を引き出す「エンパワメント」、仲間同士の支え合いを意味する「ピア・サポート」などのキーワードによる学習やコミュニケーションのトレーニングにも取り組んでいます。

主な活動に、毎週の「例会」での学習会の実施、地域で子どもに関わる教育機関や NPO 関係者を招いた拡大学習会、地域の教育機関や NPO で子どもと触れ合う活動（プログラムの考案や実施）があります。また、今年度からは愛知教育大学大学院の学校教育臨床専攻の方々とも連携し、新たな取り組みを進めています。

もくじ

もくじ 04
はじめに 06

2013 年度報告書（第 11 号）
第 I 部　活動報告
1. 例会 10
2. 拡大学習会 14
3. キッズクラブ 15
4. 教育臨床カフェ 18
第Ⅱ部　個人活動報告 21

2012 年度報告書（第 10 号）
第 I 部　活動報告
1. 例会 28
2. 拡大学習会 30
3. キッズクラブ 31
第Ⅱ部　個人活動報告 33

第Ⅲ部　資料
SOBA リーフレット 39
プレゼンテーション（2013 年度例会での学習会）資料 42
「いじめ」の理解と誤解 50
50
おわりに 57

＊今回の報告書は 2012 年度と 2013 年度の合併号として発行します。

はじめに

代表　濱田奈歩

今年度（2013 年度）も多くの方の温かいご支援のもと、SOBA の活動報告書の作成を行うことができました。

今年度は新入生がたくさん入ってくれて、少人数で活動していたときと比べて考え方の幅が広がったように思います。例会での活動では、「いじめ伝言板」や「明日が来る」を読んでの意見交換や、発達障害などについての発表会、ぱれっと掲示板での返信活動を新たに行い、人数が増えた分多様な意見を聞くことができました。例年行っているキッズクラブでは、実際に子供とふれあうことができて、普段の例会では得られないような経験をすることができました。

また、今年度入ってくれた新入生はとても積極的で、これからの活動についてもさまざまな意見を出してくれています。SOBA でやりたいことは何なのか、学びたいことは何なのかを皆で考えて、これからの活動がより良く、活発になるようにしていきたいです。

これら 1 年間の SOBA の活動をこの報告書にまとめました。1 年間の活動を振り返ることにより活動の成果や課題が見えてくると思います。また、この報告書が皆さんに SOBA の活動をご理解いただくとともに、私たちと一緒に活動するきっかけとなればと願っています。

第Ⅰ部

活動報告

1.例会

1.1.新入生との交流

①表情カード　（10 月 22 日）

「表情カード」とは、表面に表情、裏面に対応する気持ちが書かれたカードです。今回私たちは、輪になってひとりひとり順番にカードを見せて他のみんながどんな気持ちか当てていきました。

カードに書かれている気持ちには、「イライラ、怒っている」など簡単なものから「プリプリ、やきもちだ」など当てるのが難しいものまでありました。

実際に行った感想はなかなか分からない表情も多くあり、表情カードに書かれた表情を真似たりしてとても盛り上がりました。また、答えとして書かれていた気持ちの他にもどのような気持ちがふさわしいかみんなで考えてみました。

「表情カード」には、私たちがやってみた方法のほかにカードの表情を見て「こんなときどうする？」とみんなで対応を考えていくルールもありました。機会があったら是非やってみたいと思います。

②アンゲーム　（10 月 29 日、11 月 5 日）

「アンゲーム」というゲームは「勝ち負け」もなければゴールもないボードゲームです。

ゲームのやりかたは、まず時間を決めます（大体 45 分から 1 時間)。そして普通のスゴロクやカードゲームと同じようにサイコロを振って自分のコマを進め止まったマスに従います。ボードのマスには「もし、あなたがどこかへ逃げ出したい気分であれば（ボードに書かれている）ヨットに乗ってください」といった気分を聞くマスや、ボードの中央に積まれたカードをひいて質問に答えるマス、他者に書いたコメントを読み上げるマスがあります。

他の人はその質問と答えに対してコメントを書きます。コメントは「自分だったどのように答えるか」や「その答えを聞いてどのように感じたか、さらに質問してみたいこと」です。

唯一のルールは否定的なコメントをしないことです。

質問はパート 1 のカードには気軽に答えることのできる質問が多く、(例；あなたが読みたい本はどんなジャンル？）パート 2 は少し踏み込んだ質問も混じっています。(例；誰も知らないあなたについて教えてください。)

「アンゲーム」を行った感想は、普段話題にのぼらないような深い話もできるような空気になったため自分自身もあまり人には話さないようなことも話すことができました。また、みんなの知らない一面をみることができたような気がします。

「表情カード」「アンゲーム」は行うメンバーによってまた違ったものになると思います。来年度、新入生が入ったらまた「表情カード」「アンゲーム」をやりたいと考えています。また、他の人の気持ちを考えるようなゲームがあったらやってみたいです。

1.2.学習発表会

精神障害や発達障害などの中で興味をもったことについて各自で調べ発表することを約一か月にわたり行いました。各自調べたことのみではなく、他の人々の発表をきいて学習を深めました。1 人または 2 人チームで発表を行いました。取り上げた内容は以下の通りです。

・PTSD
・ADHD
・自閉症スペクトラム
・LD
・自傷行為

発表をするにあたって使用したパワーポイント資料は巻末に掲載しております。

＜発表を行った感想＞
・言葉はよく聞くもので関心もあったが、詳しくは知らなくてテーマに設定した。自分の興味ある分野を調べるだけでなく、それについてまとめて人前で発表するということが、知識のインプットとアウトプットの勉強にもなったと感じる。
・ほかのメンバーの関心のある分野を知ることができたし、プレゼンの工夫の仕方がお互いの刺激になった。
・意外に自分の身近にもいるのではないかと考えるきっかけとなった。概要をつかむことができた。興味が広がった。
・意外に自分は知らないと実感した。新しい疑問がたくさん出てきた。
・深く理解し、さらに興味が深まった。
・みんなの発表を聞くことで自分の興味の輪を広げることができた。
・いかにわかりやすく伝えるかがとても難しかった。しかしそれがどのように人に伝えるのかという勉強になった。
・様々な本を読むことができ、考えを深めることができた。

1.3.いじめ伝言板・明日が来る

朝日学生新聞社発行の朝日中学生ウィークリーには、いじめた・いじめられた体験やいじめの悩み相談、いじめに関する意見などが掲載された『いじめ伝言板』と、過去の『いじめ伝言板』をもとにしたフィクションである『明日が来る』という漫画が掲載されている。毎回の例会ではそれらを取り上げ、自分の感想や意見を出し合った。その中で、思い出した自分の体験なども含めて話し合うことで、改めていじめというものについて考えることができた。

2012 年 12 月 16 日版の朝日中学生ウィークリーの『明日が来る』には、クラスになじめず、教室にあまり通えなくなった女子生徒が登場する。そこで、クラスの担任が「なぜ彼女が最近教室に来ないか、わかるか」と他のクラスメイトたちに問いかけ、それを聞いたクラスメイトたちは次々に謝り、女子生徒がだんだんと教室に通うようになり、クラスに戻っていく様子を描いたものである。

私たちは、もし自分がそれぞれの立場だったらどう思うか、どのような行動をとるか考えてみることにした。まず、女子生徒の立場で考えてみると、「謝ってほしいわけではない」「謝られてもまた教室に戻る勇気はない」という意見が多かった。また、「形式的な謝罪になってしまっているのではないか」「逆効果ではないか」などの意見も出た。次に、他のクラスメイトの立場で考えると「もし自分が実際にいじめを見たわけではないとしたら、自分よりもいじめた本人が謝ればいい」という赤裸々な意見が出された。最後に、もし自分がこのクラスの担任だった場合を考えてみると、この担任とは違う行動をとると考える人が多かった。それぞれの意見に共通していたのは、他のクラスメイトに説明をする前に、女子生徒がどうしたいのか、担任として何をしてほしいのかということに配慮して行動するべきという点である。「勉強をするために学校に来ているのだから教室に戻るべき」という考え方ではなく、「不登校＝人生のつまずきではない」「いろんな道があるから大丈夫」ということを伝え、女子生徒の意見を尊重し、見守っていくことが大事なのではないかという考えにまとまった。

この例会では、『明日がくる』に関しての議論から、いじめが起きる原因を考えてみた。最初に出たのは、「その相手のことをよく知らないまま判断してしまうから」という意見だった。相手のことをいやだなと思ってしまうことが悪いのではなく、相手のある一面を見ただけで、それが全てだと判断して、いじめというかたちで表現してしまうことが大きな原因なのではないかと考えた。その他にも、「最初は些細なことでも、そこで嫌だと言えないとエスカレートしていく」「40 人の教室では担任の目が行き届かないから」など、それぞれの体験も含めて発言された。また「学校があるからいじめが起きる」という考えに対して、「学校を卒業して、社会に出てからもいじめは起きるのではないか」という反対意見も出た。

このように、新聞記事を題材にした討論から、いじめについて考えていくことができた。1 度の例会で多くの記事を取り上げるわけではないが、その記事を読んで自分が感じたことや考えたことを率直に出し合うところから発展させ、お互いの考えを交換することができたと思う。

1.4.ぱれっと掲示板

ぱれっと掲示板とは、悩みを抱える人々が、だれかに相談したくて書き込む掲示板です。私たちは、その悩み相談の書き込みに対する返事を、みんなで考えて返信しました。

相談内容に対して、納得のいく文章に仕上げるために、何度も修正を繰り返して仕上げました。私たちが返信の文章を考える際に、いくつかの点に気を付けました。

まず、「辛い状況の中、書き込んでくれてありがとう」と伝えるということと、今までの頑張りを褒めるということでした。相談者は、誰にも相談できない大きな悩みを、勇気を出して書き込んでくれたはずなので、まずそれに対してお礼を言うことで、相談者が私たちを受け入れてくれると思ったからです。また、今までの頑張りを褒めることで、相談者は自分を肯定して認めてもらえたと感じ、安心感を与えることができるのではないかと思ったからです。

次に、こちら側の一方的な押し付けにならないように、いくつかの案を挙げる、ということでした。そして、押し付けるような文面にならないように、「正解があるものではないので、参考になればうれしいです」という一文を入れました。

最後に、「また書き込んでください」という文を入れました。本当に相談者に寄り添って救いたいと思うなら、やはりその子とのやりとりが必要だと思い、また書き込んで欲しいと伝えました。

文面は完成して送信したものの、この活動にはいくつかの心残りがありました。

まず、相談者の状況を詳しく把握できない状況で、返信しなければならないということでした。相談者は小学生なのか中学生なのか、友人に関する状況など、相談者に関する情報が少なすぎるせいで、適切なアドバイスをすることが難しいと、文面を考えていく中で感じました。

次に、相談者とのやりとりができていない、ということでした。後日その相談者は、私たちの返信を受けて再び書き込みをしてくれましたが、それに対して私たちは何も返していません。その後相談者がどうなったかも、今は分からない状況で終わっています。

一番理想的な形は、メールなどで、個人的にやりとりをすることではないかと思います。

相談者が、掲示板に勇気を出して悩みを書いてくれたおかげで、私たちと相談者は出会うことができました。しかし、掲示板では書きにくいことも多々あります。ですからその次は、掲示板を離れて、個人的にやりとりができる環境が整えられたら、より相談者に寄り添うことができるのではないか、と思いました。

2.拡大学習会

・「子育て・子育ち NPO スコップ」杉浦登喜子さんを招いて(2013 年 11 月 12 日)

子育て子育ち NPO スコップで活動している杉浦登喜子さんをお招きして、スコップでの活動の紹介をしていただきました。

・集いの広場事業…0 歳から 3 歳までの親子を対象として親同士が流したり、悩み相談をしたりするもの。すくすく広場など。

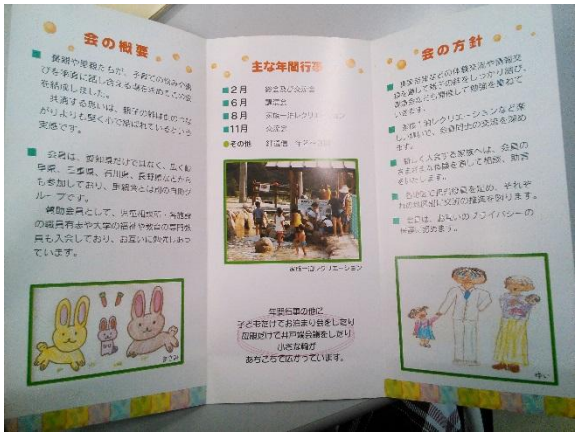
・パパのための事業…父親を対象に、さまざまな講座や休日のつどいの広場などを開催しているもの。すくすくパパ広場・パパのしゃべり場など。

・小学生のための事業…様々な遊びや学びを行い、楽しみながら地域の人とふれあったり、好きなことを見つけたりするもの。キッズクラブ事業など。

・ティーンズのための事業…中学生と赤ちゃんの交流事業や、ピアサポート事業を行うもの。

・パパやママのための事業…子育て講座や子育てサークル相談事業、NP 講座などを行うもの。

・支援者のための事業…子育てボランティア養成講座などを行うもの。



また、こっこの会という、養親や里親たちが、子育ての悩みや喜びを率直に話し合える場を作るという目的で結成された会についてもお話を聞きました。

さらに、NPO スコップの事業の一つである、中高生の居場所づくりを目的とした、「なごみんはあと事業」で、何か SOBA に企画をしてほしいという依頼を受けました。そこで SOBA では、中高生のニーズを考えながら、中高生が楽しんでくれるような企画を現在考えています。

3.キッズクラブへの参加

「キッズクラブ」とは、小学生から中学生の子どもを対象として、刈谷市の NPO 法人「子育て・子育ち NPO スコップ」によって行われている子育て支援事業です。

SOBA は毎年このキッズクラブに参加させていただいています。今年も SOBA のメンバー8 名で、2013 年 1 月 11 日(土)に行われたキッズクラブ「アイリス」での、「体験！KODOMO 遊び隊」において企画・準備し、参加させていただきました。

【日時・場所】

2013 年 1 月 11 日(土)　10:00～11:30

中央生涯学習センター（刈谷市総合文化センター「アイリス」内）

【活動内容】

今回は、4 つの工作を用意しました。

・紙コップけん玉

紙コップをふたつつなげてけん玉を作るものです。

作ること自体は比較的簡単なものだったので、紙コップをデコレーションすることも楽しんでもらえるよう、折り紙や千代紙、シールなどを準備しました。

・紙コップフリスビー

紙コップを二つ使ってフリスビーを作るものです。

紙コップに色や柄をつけると、飛ばしたときにとてもきれいに見えます。

・キャップ・デ・ホイッスル

ペットボトルキャップと牛乳パック、ストローで作った笛のおもちゃです。

ペットボトルキャップを牛乳パックを用いてつなげ、千代紙で覆い、ストローをくっつけて作ります。「ホー」という音がします。音の高低を変えることは考えていなかったのですが、どうやったら音の高低を変えられるか疑問を持ったため、いろいろ試してみました。しかし、結局、音の高低を変えることはできませんでした。

・スーパーカー

工作用紙、竹串、ストロー、割り箸を使って作ったおもちゃの車です。

あらかじめこちらで型は書いておき、子どもたちにそれを切って、くっつけて、デコレーションしてもらいました。

【参加者の感想】

●今回は 2 回目のキッズクラブでした。まず、準備の段階では、さまざまな工作を調べ、試作してみました。実際に作ってみると、意外と難しかったり、あまり面白くなかったりして、その中から、小学校低学年向けの工作を選ぶことは難しく、時間がかかりました。当日は、昨年と比べて子どもの数が少なく、一度にいろいろな子どもに目を配って接していた昨年とは違い、ひとりの子どもとじっくり接することができました。ですが、実際に子どもと作ってみて、思ったより器用に作業ができたり、思いのほか作るのに時間がかかったりしました。なので、遊ぶ時間が十分に取れなかったり、子どもに待ってもらう時間ができてしまったりしました。また、私たちは調べた工作をそのままやりましたが、スーパーカーの竹串など、もっと子どもにあわせた工夫ができたように思いました。安全にも、もっと配慮ができたのではないかと後になって思います。次回は今回の反省点を踏まえて、よりよいものにしたいと思います。

●事前準備にあまり参加できなかったため、当日は子どもに教えることよりも「一緒に遊ぶ」という姿勢を心がけました。子どもの参加人数が少なく残念でしたが、少人数には少人数のやり方、多数の子どもを相手にするときとは別の楽しみがあると思います。キッズクラブ終了後にスタッフの方にも指摘されましたが、今回はたまたま子どもが少なく大人が多いという環境だったから安全が確保されていたものの、大多数の子どもを相手にする場合には危険となり得る点が紙工作の過程にありました。それは指摘されて気づいたことで、子どもを相手にする時の安全上の配慮に関しては、自分はずぶの素人だなと感じました。子どもの遊びはもう子どもとは言えない年齢の自分にとっても楽しいもので、思わず童心に帰ってしまいました。また機会があれば参加したいです。

●今回は参加者がひとりで、ひとりに構いっきりになったのでうまくいった部分もあった(その子のペースに合わせられるし、多少脱線したことをやってもなんとかなった)けど、これがもし大人数の参加者になっていたら、うまくいっていなかったかもしれないな、ということは感じました。ひとりが脱線したことを始めて、他の子供たちにも伝染して手に負えないまで脱線してしまっては、子供達からしたら楽しいかもしれませんが、こちら側が意図した企画が潰れてしまったことになります。そうなっては成功したとは言い切れないから、そこを考えて、もっと計画的にやるべきだと思いました。また、スーパーカーの竹串の先の危なさは、自分が想定していたよりも大きな問題であったということが、キッズクラブの最中に分かりました。先の尖ったものなどの危ないものを軽く見てはいけないなと思いました。その他には、子供の発想力を感じました。自分たちが思いつかないような方法で物事を進めていく場面があって、とても感心したし、びっくりしました。それを見守っているのがとても楽しかったです。

●今回のキッズ・クラブに参加しての感想はまず小学生と接することに慣れていなかったこともあり自分の方が緊張してしまったかなと思います。また、私は小学生の子よりその妹さん（1 歳 3 ヶ月）やお父さんと接することが多かったのでこれから小学生のご兄弟が遊べるようなものを準備したらもっとよくなるのかな、と思いました。また、今回妹さんと

遊んでいるときにお父さんに日本の学習制度？について尋ねられたのでもし大学生と話がしたい親御さんがいたら話ができるといいと思いました。（もちろん子どもの参加人数にもよりますが）スコップの方のご指摘があったようにスーパーカーを作っていた際に暇になってしまう時があり、お父さんのもとに遊びに来ていたことがあったので暇にならないような作業工程がこれから考えられるようにしたいです。また、同じくスコップの方のご指摘で「危険なことをやらせないのでなく、安全にできる方法を考えてやらせる」というお言葉は今まで自分たちでは思いつかなかっただろうことだったのでとても勉強になりました。今後は危険なこともできるように作業工程を考えていきたいです。

●最初は楽しみと不安が半々でしたが、最終的には非常に楽しむことができました。また勉強になりました。私は基本的には参加者の妹さんと遊んでいました。小学生とは違ってどこに興味をもつかわからず、手探りの状態でしたが、泣かずにおとなしく遊んでくれてよかったです。参加者の子とは最初だけ一緒に工作をしましたが、少し自分が手を出しすぎてしまったようにも感じました。どこまで手伝うべきか、どこまで自分の力でやらせるべきかという点が自分にとっては難しいところでした。キッズクラブの方に頂いたアドバイスにもありましたが、今回は子どもが一人だけだったので何とかなった点がいくつかあったようです。多くの子どもたちが相手の場合には問題が出てきてしまったのか思うと、よくよく反省する必要があると思いました。頂いたアドバイスは自分たちでは気づかなかった点ばかりで、非常に勉強になりました。私はやはり教員養成課程ではないので、なかなか子どもと関わる機会がありません。したがって、今回のキッズクラブは良い経験となりました。子どもとの関わりというのは自分の将来のためにも重要な経験なので、今回の経験を活かしつつ、子どもと積極的に関わっていきたいと思います。キッズクラブ非常に楽しかったです。また参加させていただきたいです。

4. 教育臨床カフェ

教育臨床カフェとは、愛知教育大学教職大学院教育臨床専攻の学生と SOBA との共同活動の総称です。今年度は、来年度からの活動開始に向けて、どのような活動をしていくかについて決定すべく、三谷聖也先生、川北稔先生にも同席いただいて、話し合いをしました。

まず、いじめをはじめとした子供に関わる問題について考えるという SOBA の活動内容を紹介し、その後、教職大学院教育臨床専攻の大学院生の主な活動である「アイリスパートナー」の活動についての説明や活動内容についてお話を伺いました。

来年度からの活動開始に向けて、活動目標、活動内容、教育臨床カフェの活動宣伝方法、活動場所等についてどのようなことをしていきたいか、どのような工夫ができるか意見を出し合いました。

活動目標については、学内の他の支援施設との兼ね合いを考慮し、支援者支援と心理教育を通し、地域社会への貢献を目指すことになりました。

活動内容については「教育臨床カフェ」の名の通り、カフェやバーのような、生徒が気軽に来て互いに話をすることのできる場や、一時的に居場所のなくなってしまった生徒やひとりで過ごすことを心細く感じる生徒が足を運べる場の提供をすること、また、話題のテーマをあらかじめ指定し、そのテーマが好きな人ばかりを集めて交流するサークルの前段階的な活動を行い、人と人とのつながりを支援すること、いじめ問題や子どもの発達や心理に詳しい先生を呼んで講演会をすることが挙げられました。

活動の宣伝方法としては、従来のポスター掲示や資料の配布のような紙媒体を利用した方法だけでなく、インターネットを活用した方法という案が出されました。そのほかに、学校祭への出店や、マスコットの募集、大学生協との連携という案も挙げられました。また、活動場所への誘導と活動のアピールのために看板を設置する意見がありました。

活動場所については集客を第一に考え、学部生が足を運びやすい場所として、大学内の教室という意見が挙げられました。

活動目的の達成のための工夫として、机の配置を意見交流がしやすい形態にしてはどうかという意見や、生徒のプライバシーに配慮した空間づくりをしてはどうかという意見、生徒が快適にリラックスして過ごせるように飲み物を提供したり、いじめ問題や子どもの発達や障害に関する書籍を設置したりしてみてはどうかという案が出されました。

2 月の第 3 回目の話し合いの際に三谷聖也先生が「教育臨床カフェ」の事業構想をまとめたプリントを作成してくださいました。

今年度はたった 3 回の話し合いでしたが、たくさんの素敵な意見が挙げられ、とても充実した話し合いだったと思います。構想がとても現実味を帯びはじめ、来年度からの活動がとても楽しみです。

第Ⅱ部

メンバー感想

SOBA での 4 年間を振り返って

4 年　石原沙也加

4 年間を振り返ってみると、SOBA に入ってから様々な経験をすることができたと改めて感じます。

1・2 年生のときは、フリースクールやキッズクラブ、また SOBA の先輩が働いていらっしゃる施設でのボランティアなど、初めてのことを多く経験させていただきました。初めてのことばかりで戸惑うことも多く、先輩に頼りっきりになってしまったり、自分から動くことができなかったりと反省することもありました。ですが、子どもたちと関わる中で、楽しそうに遊んでいる姿や表情を見るたびに、私も嬉しくなり、ボランティアに来てよかったと思いました。また、例会でのミニスピーチやメール・FAX の返信では、他の人の意見を聴くことで、新たな発見や気づきを得ることができ、自分の考えを深めることにつながりました。それと同時に、その発見や気づきを自分の中でまとめ、言葉にして周りの人たちに伝えることの難しさを知りました。

3 年生のときは、メンバーの人数がこれまでに比べて格段に減り、今後どうしていったらよいのかを考える時間が増えました。少人数でしたが、ミニスピーチや SST を行うことで、今までで 1 番、お互いをよく知ることができた 1 年だったと思います。そして、今後についてよく話し合い、外部の方を招いてアドバイスをいただいたこともあって、4 年生時には、たくさんの後輩もできました。SST も多くやりましたが、今年度はいじめに関する相談活動を行う、いじめ伝言板について意見を交換し合うなど、SOBA の本来の目的に沿った活動を行うことができました。人数が増えたことで、考えの幅も広がったと思います。

最後に、SOBA の活動を支え、盛り上げてくれた後輩たち、SOBA に参加するきっかけをくれて、いつも一緒に活動してくれた同級生、そして、学習の機会を多く与えてくださり、私たちの活動を温かく見守ってくれた川北先生、本当に感謝いたします。ありがとうございました。

ＳＯＢＡでの４年間

4 年　水野彩音

私は、悩んでいる子どもを支えられるような人になりたいという思いを持って、この大学に入学し、ＳＯＢＡの活動を知りました。

ＦＡＸ交換やキッズクラブ、中学生新聞を使った事例検討など、ＳＯＢＡの活動の中では「何が正解なのか」ということはない難しい問いが多くあり、相手に寄り添って一緒に考えていうことが、その人にとっての正解に近づくことができるのではないかと思いました。

ＳＯＢＡでは、さまざまな人々を理解するために、児童虐待や発達障害、いじめ、精神障害の勉強を活動の中でしてきました。そこで得た知識を活動の中で活かしながらも学業やボランティア活動など、大学生活の中で活かせたことも多くありました。また、自分一人で考えることも、ＳＯＢＡのメンバー皆で考えれば、さまざまな意見を聞くことができます。一つのいじめの事例を取っても、自分では気付けなかったような気付きを得ることができました。

悩んでいる人々の力に少しでもなればと思い、2013 年度から始めた掲示板への書き込みは、相談に対して求められた回答ができていたかは分かりませんが、相談者さんの「きいてほしい」という思いをくみとって回答できたと思います。一つでも回答が

多ければ、それだけ相談者さんの思いが報われるのではないかと思うのです。よい回答作りのためにわれわれが学ばなければならないことは多いと思いますが、これからもぜひ続けていただきたい活動の一つです。

また、ＳＯＢＡのＯＧの先輩が勤務していらっしゃる児童養護施設でのボランティアや、ＳＯＢＡの活動の一つである、キッズクラブが印象に残っています。ＳＯＢＡは、ボランティア活動についてそれまで躊躇しがちであった私に、参加してみようという勇気とやる気を与えてくれたように思います。また、活動にまつわる学習への意欲も抱かせてくれました。

最後に、共に活動して、色んな視点から意見を下さったＳＯＢＡのメンバーの皆様、そしてＳＯＢＡの活動を見守り、支えてくださった川北稔先生に深くお礼を申し上げます。4 年間本当にありがとうございました。

SOBA での 1 年間を振り返って

2 年　濱田奈歩

今年度の SOBA の活動は、前年度とは大きく変わり、とても中身の濃い 1 年となりました。

新入生が入るまでは「いじめ伝言板」や「明日がくる」を読んでのディスカッションや、「ぱれっと掲示板」への返信活動を行いました。先輩方は今までやってこられたようですが、私には初めての活動でした。「いじめといじりは違うのか」ということや、「いじめの仕返し」についてなど、いろいろな人の意見が聞けて、普段このような話をする機会はなかなかないため、とても参考になりました。また、「ぱれっと掲示板」への返信活動では、なんて返信するのが良いのか、どんな言葉を使えば良いのかなど、気を配ることがたくさんあったり、実際に相手に対面して話を聞けるわけではないので、詳細がわからなかったり、その人の気持ちが完全にはわからなかったりして、想像以上に難しいものがありました。しかし、将来学校現場で、悩みを抱えた子どもにきっと出会うと思います。養護教諭を目指す者として、とても良い経験ができました。

そして今年度は 9 人もの 1 年生が入ってくれて、SOBA の活動はとても活発になりました。引き続き「いじめ伝言板」などの活動も行ったのですが、みんな積極的に意見を出してくれて、とても活発な話し合いになりました。また、夏休み明けに 1 年生と私で興味のあることについて調べ、発表するという活動も行いました。発達障害についてが主だったのですが、今まで知らなかったことを知ることができたり、調べることで知識を深めることができたり、とても有意義な活動になりました。

今年度は 1 年生が入ってくれたことにより、SOBA に新たな風が吹いてきたなと感じた 1 年でした。また、大学院生の方々と連携した企画も進み始め、来年度もまた変革の年になりそうです。1 年生は本当に積極的で、SOBA の活動について意見を出してくれることもあり、とても助かっています。私自身、SOBA でやりたいことは何なのか、SOBA で何ができるのか考えたことがとても多かった 1 年でした。1 年生と協力しながら、SOBA での活動をより活発にすべく、来年度も頑張っていきたいと思います。

今年度の SOBA の活動が円滑に行われたのは、新しく入ってくれた 1 年生、忙しいながら活動に参加してくださった先輩方、いろいろな経験をする機会を与えてくださった川北先生のおかげです。支えてくださった方々に感謝しながら、来年度は 4 年生

がいないので、最高学年として責任を持って活動していきたいです。

1年　佐野朱里

これまでのSOBAの活動の中で、私にとって大きな成果だったのは、みんなのいじめに関する体験や意見を聞き、自分の考え方の幅を広げられたということです。学校生活を送る私たちにとって、いじめは身近な問題ですが、いじめについて議論をしたり、自分の体験を話したりする場は、なかなかありませんでした。私を含めた多くの人が、直接は関わっていなくても、何らかのかたちで、いじめに関する体験をしていました。それらを共有したことで、私が持っていたいじめというものに対する考え方が大きく広がりました。

また、自分の興味のある分野について、パワーポイントを用いて発表を行った際、私は学習障害を取り上げました。発表の準備を行う中で、自分がいかに障害について無知だったか、思い知らされました。本やネットから得た知識だけでなく、実際に障害をもつ子どもと関わったことのある仲間の話は、とても興味深いものでした。

約1年間、主にいじめについてみんなで考えてきましたが、いじめとは何なのか、何が原因なのか、どうしたらなくなるのか、私にはまだはっきりとはわかっていません。私は、みんなで知識や情報を持ち寄って考えることができるのが、SOBAの魅力だと思っています。これからも、SOBAの活動を通して、仲間から多くのものを吸収しながら、考え続けていきたいです。

1年間の活動を通じて学んだこと

鈴木美帆

私は6月の終わりから約7か月間SOBAの活動を行ってきました。もともと、サークルもやっていないし、同じ学科の子たちが入っているから私も入ろうというあいまいな動機で入りました。実際に入ってみるととても楽しく、ときに笑いながら、ときに真面目に話し合いをしてきました。

私が1年弱で行った活動は主に4つです。

まず1つ目は中学生新聞を使って「いじめ」に関する意見交換兼学習会です。私はこの活動は自分が一番求めていたものに近いと感じています。記事を読んで、どこが良いのかまた悪いのか、どう行動すればよかったのかなどを話し合う、一見単純な取り組みですが、メンバーの体験や素直な気持ちを聞き、意見をぶつけ合うことで自分にはなかった視点を発見できました。また、自分の体験をいかに正しくわかりやすく伝えるかという勉強にもなりました。

2つ目は学習発表会です。これはメンバーの森ありさとともに行いました。私たちが調べたのは自閉症スペクトラムについてです。図書館でそもそもの意味を調べるところからスタートし、大筋をきめ、資料を集め、発表資料を作成するのは、夏休みが長いといってもとても骨の折れる作業でした。しかし、調べれば調べるほど出てくる疑問やそれを解決できた時の喜びというのはそれ以上のものがありました。また、2人で協力するということで、仕事を分け合うことの大切さと、難しさを学ぶことができました。発表では、伝えることの大変さやほかのメンバーの興味など様々なことを知り、さらにメンバー間の距離が近くなったように感じます。

3つ目はキッズクラブです。これは準備

の段階から楽しみつつも苦労を重ねました。何を作るか、何を用意すればいいのかなど様々な問題点が浮かび上がりました。また本番でも様々な問題点があり、スタッフの方に厳しいアドバイスをいただきました。次回からの参考になったし、何よりこれから子供と付き合う時の体験のようなものになったように感じます。

最後が、臨床カフェです。これは大学院の方々と触れ合う良い機会となっています。まだまだ始動したばかりの出来立ての企画ですが、メンバーと大学院の方々とが上手に連携することで、きっと素晴らしい企画となると思います。ここでも自分の意見を伝える勉強ができ、とても楽しみながら取り組めています。

結論として、1 年間で何を学んだのかというと、コミュニケーション能力だと思います。話す大切さと難しさ、聞く楽しさと重要性、相手の立場や状況によっての違いなど、専門知識ではない部分について、学ぶことができたように思います。来年は臨床カフェも本格的に始動し、メンバーも増えます。先輩として後輩にいままでしてきてもらったことを伝え、自分自身もさらに様々なことを学び、吸収していきたいと思います。

今年度を振り返っての感想

1年　鳥本大貴

ＳＯＢＡの活動を通して考えさせることが多くあった。

特に発表会では、精神疾患や発達障害について各自でテーマを絞りこみ、調べ上げてプレゼンするという自主的な取り組みが、大いに学びになったと感じる。発表会やミニスピーチなど、勉強会の要素の強い活動があることはＳＯＢＡの誇れることの１つだと思う。

また、掲示板に寄せられるいじめの悩みへの返信をメンバーで考えたことも印象に残っている。メンバーそれぞれ考えていることが微妙に違ったり、ある部分では一致していたりするのを感じた。

まだ宙に浮いた企画もあれば、もっとこうすればよかったと反省することもあるが、この一年で成長できた部分は少なからずある。これからもエンパワーメントの意味を考え続けていきたい。

1年　中根悠

私は大学では「いじめ・不登校」について学びたいと思い臨床福祉心理コースに入りました。授業後の先輩の SOBA の説明を聞いたときに SOBA に入ったら自分の興味を持っていることが学べそうだと思い、後期から SOBA に参加しました。SOBA に参加したことで、ボランティア、外部の方との話し合い、また普段の例会での先輩のお話や、みんなが調べた発表を聞いたり、アンゲームや表情カードでコミュニケーションをとったりといろいろな経験をすることができました。また、これらの経験の中で大学の授業のみでは得られない知識や、より深く考えるきっかけとなりました。

その中での印象に残っていることは「キッズクラブ」です。小学生と接する機会は普段なかなか無いのでどんな工作を準備したら喜んでくれるのか、またどこまでできるのか、を考えるのはとても大変でした。また、前日はとても緊張してしまいましたが、一緒に楽しむことができたと思います。最後にはスタッフの方に改善点やアドバイスもたくさんしていただきました。次回も是非参加したいです。

しかし、私が参加した後期はいじめ相談がなくなってしまい、活動内容に少し物足りなく感じていました。そんな時に大学院の方と合同で「臨床カフェ」を行うことになり、昨年から月１回ミーティングを行っています。

来年度は、「臨床カフェ」を通じてお互いの活動をもっと多くの人に知ってもらいたいです。また今までとは一味違った新しいことができそうで楽しみです。もっともっと素晴らしいSOBAの活動を知ってもらえたらと思います。

一年間の活動を通して

１年　中畑杏梨

私は、人の役に立つことを考えたり実行したりする活動がしたいと思い、SOBAに入りました。はじめは、ボランティアサークルと言うくらいだから少し堅苦しいかなと思っていましたが、実際は笑顔のあふれる暖かい雰囲気で、思わず足を運びたくなるような雰囲気で安心しました。

また、サークルの活動場所であるミーティングルームに子どもの発達や障害に関する書籍が多く置いてあることに驚きました。ただ場所を与えられて活動しているだけなのではなく、本当に真剣に、心から子どものことについて考えているのだと実感しました。

SSTなどのコミュニケーションゲームを利用したメンバー間の交流や年末のキッズクラブの企画などの楽しい活動だけでなく、各自でPTSDや学習障害などテーマを決めて、それについてまとめて発表会を行ったり、インターネット上のぱれっと掲示板に投稿された悩み事についてメンバーで意見を出し合ったりするなど真剣に活動に取り組む面もあり、メリハリがあってとても充実した１年でした。

私が今年度の活動の中で最も印象的だったのは大学院生の方々との共同企画である「教育臨床カフェ」の話し合いです。今年度は方針を決める話し合いのみで実際に行動することはなかったのですが、実現したらとても面白そうな企画案が多く出され、大学院生の方々の知識の深さや発想に驚きました。また大学院生の方々がどのような活動をしているのかを垣間見ることができ、有意義な時間を過ごすことができました。来年度からの本格的な活動がとても楽しみです。

SOBAでの一年を通しての学び

１年　松下夏子

私はSOBAの活動に非常に興味をもち、今年度から参加させていただきました。今年度のSOBAの活動を振り返ると、何よりも自分自身が多くのことを学ぶことができたと感じます。自分にとって一番印象的なことはNPOスコップさんの講演会です。自分が将来やりたいと考えていることに近い領域であったため、どの話も非常に興味深く、将来への意識が高まりました。刈谷市で様々な子育て支援活動が行われていることを私は今まで全く知りませんでした。地域で行われているさまざまな活動にも自分は目を向けるべきだと感じました。

また、そのNPOスコップさんの活動の一つであるキッズクラブに参加させてもらえ、貴重な経験をすることができました。子どもたちがどのような工作に興味をもってくれるかわからず、準備段階から苦戦しました。当日もさまざまな指摘を受ける結果となりました。キッズクラブに参加して

くれた子が一人だけであったのは、正直予想外でしたが、どのような状況にも対応できるように準備すべきでした。反省点は多かったものの、実際に子どもと触れ合うことができたのは自分にとって良い経験でした。子どもと触れ合う機会は自分には少なく、最初は戸惑いの気持ちが強かったですが、終えてみると非常に楽しく感じ、貴重な時間を過ごすことができました。

そして、普段の例会や学習発表会からは多くの知識を得ることができました。特に学習発表会は自分が調べ理解を深めるだけではなく、他の人の発表から様々な知識、意見を得ることができました。この SOBA の活動で、私は他者のさまざまな考えを聞くことができました。SOBA では多様な意見を聞くことができ、その意見が自分自身の学びになりました。

正直に言うと、SOBA の活動が想像と違い戸惑ったこともありました。しかし、この一年間の活動を通して多くのことを学び、経験しました。多くのものを得ることができました。今年度から 1 年生が多く入り、活動がこれから活発になっていくと思われます。来年度からも多くのことを学び、誰かの支えになれるような活動をしていきたいです。

SOBA の活動を通して

森ありさ

SOBA の活動を通して、私は様々なことを考える機会が増えました。

ちょこっとチャットやアンゲームでは、自分自身のことを深く考えたり、同じ SOBA のメンバーの仲間のことをよく見て考えたりする機会がたくさんありました。自分自身のことを振り返りながら話すことで、自分がどんな人生を歩んできたのか、また自分とはどのようなものなのかを発見できるようなきっかけになりました。また、仲間の話を聞いて、よく知り、共有することで、お互いの絆を深めることができたと思います。

そして、新聞記事を見ての話し合いやぱれっと掲示板などのような活動の中では、いじめについて様々な面からたくさん考えることができました。今まで、いじめはあってはならないことであるが、対処が難しいという印象が強く、どうしようもないという印象もありました。しかし、これらについて深く話し合うことで、どうしようもないいじめが起きているとき、どのようにしていじめに立ち向かえるか、どうすれば傷が少しでも癒えるかなどを考えることができました。自分が思っていること以外の、他人の意見も聞けることで自分の考えの見方も変わったように思われます。

ただ、ぱれっと掲示板に関しては、もう少し、相談者とのやりとりを増やし、相談者の力になることができたらよかったな、と感じました。今は難しいかもしれませんが、相談者に寄り添えるような環境を作ることができたらいいなと思います。

また、一度だけの活動でしたが、キッズクラブもいい経験になりました。反省点は多々ありますが、子どもとものづくりをするときに、何に注意すべきか、どんなことに考慮すべきかよく分かりました。このようなことは、実際に経験してみて分かるものなのだなと思いました。このような機会がもっと増えてほしいと感じます。

これから楽しみなことは、大学院の方との連携である「臨床カフェ」についてです。大学の生徒で悩んでいる人への相談相手、一緒に昼ご飯を食べる機会、Twitter の作成などのようなアイディアが出ています。今

出ているアイディアを実行することができれば、SOBA の活動が広がり、自分にとっても得るものがたくさんあると思います。

まだ、これに関してはこれからなので、楽しみです。

第一部

活動報告

1.例会

(1) ミニスピーチ

ミニスピーチとは、例会の始めに、メンバーの内の一人が、数分間スピーチをするものです。メンバーが調べたことを発表し、意見を出しあい、理解を深めました。

数分間のスピーチとはいえ、発表したことから派生して、様々なことを考えることができ、時には、数時間話し合うこともありました。

スピーチの内容は、勉強したいもの、討論したいもの、問題意識のあるもの、各自の授業や実習での学びなど様々です。具体的には、いじめや不登校、発達障害、自傷行為といったことなどが挙げられます。

この取り組みは、2010 年度から始めたもので、様々な問題について自分たちで知らないことを見つけて話し合おうということで始まりました。自分たちで調べ、共有することで、メンバーは今までになかった意識を持つことができました。

(2) SST

SST の教材を使って、実際に取り組みました。小学校一年生～三年生までが対象となっている、「なかよしチャレンジ」、小学校四年生～中学生までが対象となっている「フレンドシップアドベンチャー」、高校生・大学生対象と保護者対象のコミュニケーションカードゲーム「ちょこっとチャット」を実際に行いました。

SOBA のメンバーのことを、より深く知ることができました。また、子ども向けのものであっても、私たちにとって考えさせられる内容のものもあり、意見の分かれることもたびたびありました。

学校生活ではよくある、戸惑う場面が数多く用意されているため、これから教師になる人にとってはもちろん、教師にならなくとも、自分が子どもを持ったときに、子どもの抱える問題を知り、考えるきっかけになったと思います。

(3) メール・FAX 返信

今年度は、一件の FAX のみでした。

曜日ごとに当番を決め、メール・FAX のチェックを行っています。新着があった時は、

当番が内容を確認後、コメントを残します。そして直近の例会で話し合い、返信案を作成しています。

(4) ブログの更新

SOBA の活動を知ってもらうため前年度より行っている、ブログの作成も、今年度も引き続き行いました。

ブログの内容は、例会の内容と、感想です。相談メール・FAX については書かない、など、いくつかの取り決めが作られています。それらに則って、例会の参加者のうち一名が例会後に執筆しています。

コメントなどはいまだに 0 件であり、当初のコンセプトを果たせたわけではなかったように思いますが、SOBA の活動の記録として、活用できたと思います。

SOBA のブログ→「はてなダイアリー」内「SOBA の活動」

2. 拡大学習会

(1) 大学院の公開授業への参加(2012 年 12 月 4 日)

大学院の公開授業の、あいち CAP の方々によるワークショップに参加しました。

昨年度の SOBA でもゲストを招いて学習会をしたため、CAP の取り組みについては、知っているメンバーもいました。しかし、実際のワークショップを受けるのは皆、初めてであったため、とても楽しく、子どもになりきって取り組みました。

これから子どもに伝えていきたいメッセージを学ぶことができました。

(2) 「名古屋市市民活動推進センター」の加藤舞美さんを招いて(2012 年 12 月 4 日)

学生のころから、ボランティア活動に熱心に取り組んでいらっしゃる、名古屋市市民活動推進センター職員の加藤舞美さんにお話をしていただきました。

加藤さんも、学生時代はボランティアの学生サークルの代表をしていらっしゃったこともあり、経験談も交えながら、SOBA のあり方について、話し合いました。

SOBA の問題を話し合ったうえで、今後の SOBA について、私たち(SOBA のメンバー)はどうしていきたいのか、また、そもそも SOBA に入ったきっかけなどを尋ねられ、私たちにとっての SOBA の理想のあり方を考えるきっかけになりました。

SOBA の活動を広げるため、具体的に私たちに何ができるのか、ということをご自身の経験を踏まえ、たくさん教えていただきました。

＜私たちにできそうなこと＞

・チラシ作り
・SNS を活用した広報
・ボランティア養成講座などの参加

3. キッズクラブへの参加

「キッズクラブ」とは小学生から中学生の子どもを対象として、刈谷市の NPO 法人「子育て・子育ち NPO スコップ」によって行われている、子育て支援事業です。

SOBA は、「キッズクラブ」に毎年参加させていただいています。今年も、2013 年 3 月 9 日に SOBA のメンバー5 名がキッズクラブ「アイリス」での「体験！KODOMO 遊び隊」において企画・準備し、参加させていただきました。

【日時・場所】
2013 年 3 月 9 日　中央生涯学習センター（刈谷市総合文化センター「アイリス」内）

【活動内容】
時間内に、二つのおもちゃを作ることができるようにしました。

○飛ぶ！紙コップ人形
紙コップと輪ゴムを使用し、輪ゴムの力で紙コップが飛び跳ねる、おもちゃです。
折り紙や画用紙を紙コップに貼り付けたり、絵を描いたりすることで、様々な人形を作ることができます。

○くるくるアニメ
通称「おどろき盤」と呼ばれる、おもちゃです。
円盤(今回は、紙皿を使用しました。) に 5 ミリほどのスリットをいれ、スリットとスリットの間にパラパラ漫画と同じ要領で、変化する絵を描きます。円盤を棒状の物(今回は、割り箸を使用しました)に固定し、鏡の前に立ちます。絵柄が鏡と向かいあわせになるように持ち、スリットから鏡をのぞきこみ、円盤をまわすと、アニメのように、絵柄が動いて見える、という仕組みです。

【参加者の感想】

● 初め、見本を見せたときには「全然面白くなーい」と言っていた子も、友だちや私たちとおしゃべりしながら楽しそうに工作していたのでよかったです。
一方で、子どもが話すことに夢中になり、工作するのに時間がかかってしまったことが反省点です。とても楽しそうに話してくれるので、それをさえぎりたくないという気持ちから、ついつい聞いてしまいました。うまく工作に集中させるような声かけができると良かったと思いました。
今回は特に、ハサミを使うなど、集中を要する作業もあったので、危険を回避するためにも集中させるような声かけが必要だったと思いました。今回の反省を生かし、子どもが

楽しく安全に活動するために、メリハリをつけて接することができるようにしたいと思いました。

全体的には、大きな事故もなく、子ども達と楽しい時間を過ごす事ができました。

● 3月のキッズクラブでは、工作をしました。子どもたちは作り始める前から興味津々で、とても意欲的に参加してくれました。

しかし、思うように手を動かすことができず諦めてしまう子や、自分の作品に満足できていない子もいました。もう少し年齢に合った内容にするとともに、子どもが使いやすい道具を選んだり、様々な状況を想定して準備をしたりしておくべきであったと反省しました。

また、私にとっては最後のキッズクラブでした。作品が出来上がった時の子どもたちの嬉しそうな顔がとても可愛く、子どもたちと関わることの楽しさを再確認することができました。キッズクラブのやりがいを感じることができなくなることに寂しさを感じているとともに、キッズクラブに参加させていただけたことを光栄に思っています。ありがとうございました。

● まず、子どもたちは何を作るのが、面白いと思うのか、そして、どういうものなら作ることができるのか、私は右も左も分からずに、インターネットで工作について調べたり、図書館で図画工作の本を読んだりして調べました。

様々な工作を調べたのですが、キッズクラブの対象年齢が小学生から中学生までと広く、皆が楽しめるようなものを作りたい、という思いがあったため「何を作るか」を決めるのに、とても時間がかかってしまいました。いくつか試作品を作り、最終的に二つに絞ることができました。しかし、その二つにもいくつかの問題がありました。そして、それらの問題点を解決できず、本番を迎えてしまったことが心残りです。

ところが、本番ではスコップの方々の支えがあり、スムーズに活動をすることができました。子どもたちとのおしゃべりはとても楽しく、真剣に取り組む顔、子どもたちの笑顔を見ることができて、とても幸せでした。

キッズクラブ終了後、この活動についてスコップの方々からいくつかご指摘を頂くことができました。これらを、また次回のキッズクラブに活かしていけたら、よいのではないかと思いました。

第二部

個人活動報告

4年間の活動を振り返って

4年　寺田美紀

SOBAで過ごした4年間は、とても思い出深く、私の大学生活をより良いものにしてくれました。

私がSOBAに入った理由は、先輩方が優しくて楽しそうだったからでした。先輩方と様々なお話をするうちに、もっとSOBAの活動に取り組み、SOBAを盛り上げていきたいと思うようになりました。例会に参加し、FAXの返信や勉強会を行う中で、言葉一つ一つを大切に扱うことなどを学びました。時には各々の悩みや考えを打ち明け、くだらないことから真剣な話まで、SOBAなら何でも話すことができました。仲間たちとこのような関係性を築くことができたのは、先輩方が作り上げてきた雰囲気や優しい仲間、見守ってくださった先生のおかげです。SOBAの活動に参加するたびに、SOBAに入って良かったと実感しました。

しかし、後悔していることが一つあります。それは、SOBAの活動をもっと広める活動をしなかったことです。悩みを抱える人たちにSOBAの存在を知っていただき、大学生ならではの寄り添う支援を行っていくことが必要だと考えます。今後、SOBAの活動が広まり、悩みを抱える方々の支えになっていくことを願っています。

最後に、後輩たちが少ない人数でSOBAを支えてくれていることに、本当に感謝しています。SOBAでも思い出は数え切れず、本当に楽しくて今後の糧となる時間を過ごすことができました。ありがとうございました。

SOBAの感想

4年　水谷真夕

4年間SOBAの活動を続ける中で、ボランティアをされているたくさんの方に出会いました。どの方も、自分に何かできることはないか、役に立てることはないかと考え、活動していました。その方々はみな、とても生き生きとした表情をしていました。他の人のために力を注ぐことで自分も気分がよくなるなんて、こんなにいいことはないと思います。私も、SOBAの関係やそれ以外でいくつかボランティアをしてきました。感謝の言葉を頂いたり、笑顔に触れたりすることで、やってよかったと毎回感じました。さらに、活動を通して、自分の知らなかった様々な環境や状況を知ることができ、とても貴重な経験となりました。ボランティアは、みんながいい気持ちになれる、すばらしいものです。ボランティアサークルSOBAも、これまで以上に外でボランティア活動をする機会を増やしていっていけるといいなと思います。

SOBAに入って、私と同じように何か人の役に立ちたいと思っている人と出会い、語り合えたことも私の財産となりました。なかなか真面目に話し合うことのない話題について、自由に意見を出し合える貴重な場でした。4年間ありがとうございました。

SOBA での 1 年を振り返って

3 年　石原沙也加

今年度の SOBA は、活動の中心である FAX の返信案作成の機会がほとんどなく、昨年度までとは少し違った 1 年になったように感じます。前期は、新しく 1 年生が入ったこともあり、SST などのコミュニケーションゲームを何度か行いました。普段話さないようなことを話し合うことができ、1 年生はもちろん、今まで一緒に活動してきたメンバーについても、新しく知ることがありました。メンバーとの仲を深める良い機会になったと思います。また、後期は 3 年生が実習の報告をし、その内容について先生を含めて皆で話し合うことができました。

しかし、今年は“SOBA の今後について”という大きな課題が残りました。どのような活動をしていきたいのか、どうすれば SOBA をもっと様々な人に知ってもらえるのか、とても悩みました。外部の方を招いて、今後自分たちがどのように活動をしていけばよいのか話し合い、アドバイスをいただきました。やれることはたくさんあるのだなと思ったのと同時に、3 年生になった今、どこまで実行することができるのだろうかと不安も感じました。

SOBA では、ミニスピーチなどを通じて自分の考えを深めたり、他の人の普段聞けないような意見を聞いたり、皆で学び共有することが多くあります。来年度も皆で様々なことを考え学べたら、そして SOBA の活動が少しでも広がっていったらいいなと思います。

SOBA でのこの一年の感想

3 年　水野彩音

今年度は、ミニスピーチと SST とキッズクラブが強く印象に残っています。ミニスピーチでは、今までよりも深く話し合えたと思います。例会での人数は少ないですが、一人一人がじっくり考え、たくさんの意見を出し合うことができたと思います。

SST では、見知ったメンバーであるにもかかわらず、考え方の違いに驚くことがあったり、学校場面では、よくあることにもかかわらず、答えを出すのが難しかったりと、新たな発見があり、考えるきっかけになりました。

キッズクラブでは、準備の段階から参加するのは初めてであったため、戸惑うことも多くありましたが、とても良い経験になりました。本番では、子どもたちのたくさんの笑顔を見ることができて、嬉しかったです。

SOBA の活動を広めたい、仲間を増やしたい、とは思っていても、なかなか行動に移すことは、難しいと思いました。ゲストの方に来ていただいた時に思ったことですが、このメンバーでできることは、限られてくると思います。この限られた人数、時間でできることが、何であるのか、またメンバーで考えていかねばならないと思いました。

来年度は、四年生です。今まで以上に忙しくなると思います。その中で、SOBA の活動にどれほど参加できるのか、不安です。ゲストの方から頂いた知恵をもとに、SOBA のさらなる発展のため、少しでも活動していきたいです。

この一年、忙しかったこともあり、例会に参加できないこともありました。また、

SOBA の本来の目的である、いじめに関する相談に答える活動は、今年度においてはほとんどできませんでした。しかし、例会でのミニスピーチや SST などを通して、今までで一番充実した一年であったと思います。

私たちの活動に賛同して、SOBA に入ってくれた新入生、いつも、私と一緒に活動に参加して、支えてくれた同級生、そして、忙しいながらも活動に参加して、私たちを励ましてくださった、四年生の先輩方、たくさんの学びと、学習の機会を与えてくださった川北先生のおかげで、私は、たくさんのことをこの SOBA という場で吸収することができました。ありがとうございました。

SOBA での 1 年間

養護教諭養成課程　1 年　濱田奈歩

入学式後のガイダンスで大量に配られたチラシやパンフレットの中から、私は SOBA のチラシを見つけました。私はもともと、いじめや不登校に興味があり、悩んでいる子どもたちの力になってあげたいという思いから養護教諭を目指し愛知教育大学に入学しました。そんな私に SOBA の活動はきっといい経験になると思い、SOBA に入りました。

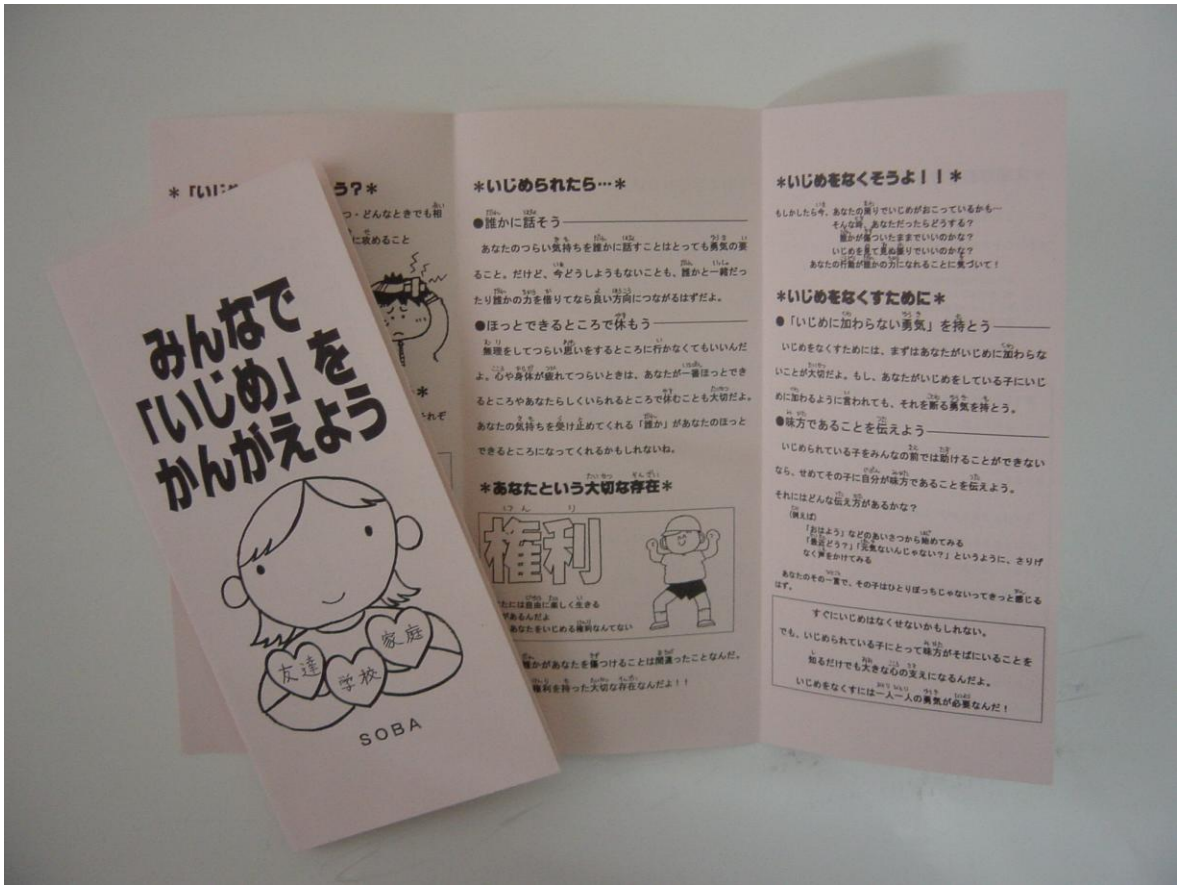
SOBA に入って早くも 1 年が終わりますが、残念ながら、今年は FAX が途絶えてしまい、先輩方が今までされていた返信活動を私は体験することができませんでした。ボランティア活動も自発的に参加してみたいとは思っているものの、忙しさに流されて手を出すことができませんでした。ボランティアサークルらしいことはあまりやれていないように思いますが、毎週の例会で、先輩が授業で学んだ内容を教えてくださったり、実習の報告をして下さったりしました。その中ではじめて得る知識があったり、先輩の考えを聞いて感心させられたり、自分でもそのことを調べてみようと思ったり、普段の活動から得られるものも大きかったように思います。また、先生が紹介した下さった大学院の公開授業に出て「子どもの権利」について考えたりもしました。

現在 SOBA は活動人数も少なく、私自身先輩に甘えっぱなしだったので、来年先輩方が引退されたら・・・という不安はあります。ですが、今少しずつ SOBA の活動を PR しようと模索しています。活動内容にはあまりこだわらず、自分たちの興味のある分野をみんなで学んで、考えて、それを外部に発信していきたいです。ブログや Face book などを活用し、まずは SOBA の活動を PR し、そこから SOBA を活発にしていきたいです。

第三部

資料

SOBA リーフレット


みんなで
「いじめ」を
かんがえよう
友達
学校
家庭
SOBA
＊いじめられたら…＊
●誰かに話そう
あなたのつらい気持ちを誰かに話すことはとっても勇気の要ること。だけど、今どうしようもないことも、誰かと一緒だったり誰かの力を借りてなら良い方向につながるはずだよ。
●ほっとできるところで休もう
無理をしてつらい思いをするところに行かなくてもいいんだよ。心や身体が疲れてつらいときは、あなたが一番ほっとできるところやあなたらしくいられるところで休むことも大切だよ。あなたの気持ちを受け止めてくれる「誰か」があなたのほっとできるところになってくれるかもしれないね。
＊あなたという大切な存在＊
権利
＊いじめをなくそうよ！！＊
＊いじめをなくすために＊
●「いじめに加わらない勇気」を持とう
いじめをなくすためには、まずはあなたがいじめに加わらないことが大切だよ。もし、あなたがいじめをしている子にいじめに加わるように言われても、それを断る勇気を持とう。
●味方であることを伝えよう
いじめられている子をみんなの前では助けることができないなら、せめてその子に自分が味方であることを伝えよう。
すぐにいじめはなくせないかもしれない。
でも、いじめられている子にとって味方がそばにいることを知るだけでも大きな心の支えになるんだよ。
いじめをなくすには一人一人の勇気が必要なんだ！

＊大切なお子さんをもつみなさんへ＊

こんなことはありませんか？

それはお子さんがいじめにあっているサインかもしれません。

- お子さんの表情が暗くなっている
- 急に学校のこと、友達のことを話さなくなる
- お子さんの持ち物や服が汚れていたりなくなっている
- 顔や体に傷がある
- 学校に行きたがらない
- 金銭をむやみに要求する

誰でも自分がいじめられていることは周りの人には知られたくないものだと思います。

しかし放って置くといじめがますます進行してしまうことがあります。

まずはお子さんの小さな変化に気づくことが大切です。

そしてお子さんの変化に気づいたらお子さんのつらい思いに向き合い、最大限の味方になって下さい。

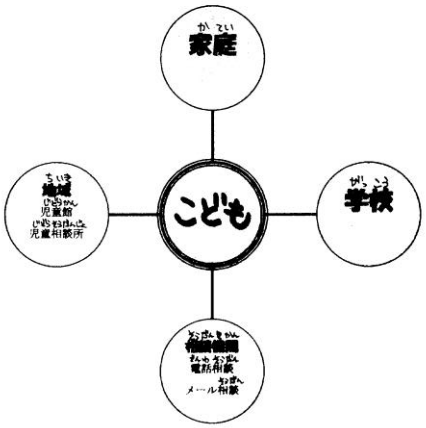
お子さんの話を全面的に受け入れるような姿勢で、じっくり聴いてあげてください。

そして周りの大人たちが子どもの視点に立って、どうしていじめが起きてしまったのか、どうしたらこれからも良い方向へ進むか、子どもと一緒に考えていくことが大切です。

＊ひとりじゃないよ＊

いじめで悩んだとき、ひとりで抱え込まないで下さい

まわりの人たちと一緒に考えていきましょう



信頼できる人

そのなかの一つとしてSOBAも力になりたいと思っています。

SOBAは学生・市民からなり、いじめに関する相談を行っています。
あなたの気持ちに少しでも近づき、一緒に考えていきたいと思います。
秘密は絶対に守られますし、匿名(名前なし)でかまいません。
学校のこと、友達のこと、家族のことなど何でも話してください。

連絡先★手紙：〒448－8542　愛知教育大学「SOBA」
FAX：0566－26－2713
メール：empower@auecc.aichi-edu.ac.jp

みんなで「いじめ」をかんがえよう

SOBA

＊「いじめ」って何だろう？＊

ＳＯＢＡが考える「いじめ」とは、いつ・どんなときでも相手が心や身体に痛みを感じるように一方的に攻めること

(例えば)
わざと相手を転ばせる
力づくで相手の物を取り上げる
相手に暴力を振るう
無視する
仲間はずれにする
相手をばかにする言葉を言う
相手が嫌なこと、恥ずかしいことをやらせる

＊それぞれの気持ちを考えてみよう＊

いじめる子、いじめられる子、いじめを見ている子はそれぞれどう思っているのかな…？

<いじめる子>	<いじめられる子>	<見ている子>
ゲームみたい	つらい	かわいそう
楽しい	悲しい	できれば助けたい
いい気味	苦しい	どうしたらいいかわからない
むかつく	怖い	同じ目にあいたくない
スカッとする	さみしい	関わりたくない
やめられない	逃げたい	自分じゃなくてよかった
やっているのは自分だけじゃない	やめてほしい	いじめじゃないよね…
	誰か助けて	
など	どうしたらいいかわからない	など
	など	

人はみんな、ものの感じ方や考え方が違うよね。
誰か一人が悲しい思いをしたままでいいのかな？
あなたの行動が誰かを傷つけているかもしれないよ。
もう一度かんがえてみて！

＊いじめられたら…＊

●誰かに話そう

あなたのつらい気持ちを誰かに話すことはとっても勇気の要ること。だけど、今どうしようもないことも、誰かと一緒だったり誰かの力を借りてなら良い方向につながるはずだよ。

●ほっとできるところで休もう

無理をしてつらい思いをするところに行かなくてもいいんだよ。心や身体が疲れてつらいときは、あなたが一番ほっとできるところやあなたらしくいられるところで休むことも大切だよ。あなたの気持ちを受け止めてくれる「誰か」があなたのほっとできるところになってくれるかもしれないね。

＊あなたという大切な存在＊

だから誰かがあなたを傷つけることは間違ったことなんだ。
あなたは権利を持った大切な存在なんだよ！！

＊いじめをなくそうよ！！＊

もしかしたら今、あなたの周りでいじめがおこっているかも…
そんな時、あなただったらどうする？
誰かが傷ついたままでいいのかな？
いじめを見て見ぬ振りでいいのかな？
あなたの行動が誰かの力になれることに気づいて！

＊いじめをなくすために＊

●「いじめに加わらない勇気」を持とう

いじめをなくすためには、まずはあなたがいじめに加わらないことが大切だよ。もし、あなたがいじめをしている子にいじめに加わるように言われても、それを断る勇気を持とう。

●味方であることを伝えよう

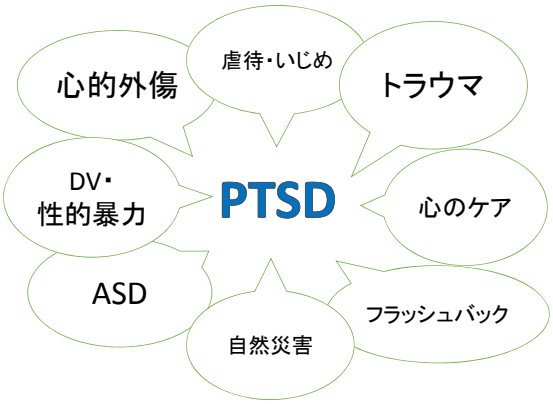
いじめられている子をみんなの前では助けることができないなら、せめてその子に自分が味方であることを伝えよう。

それにはどんな伝え方があるかな？

(例えば)
「おはよう」などのあいさつから始めてみる
「最近どう？」「元気ないんじゃない？」というように、さりげなく声をかけてみる

あなたのその一言で、その子はひとりぼっちじゃないってきっと感じるはず。

すぐにいじめはなくせないかもしれない。
でも、いじめられている子にとって味方がそばにいることを
知るだけでも大きな心の支えになるんだよ。
いじめをなくすには一人一人の勇気が必要なんだ！



トラウマって何？

私たちの日常生活での“トラウマ”の使われ方

・「交通事故がトラウマになって、運転できなくなった」
・「彼は異性に対してトラウマを持っている」
・「あの人、夢の職業に就けなかったことがトラウマなんだって」
・「生まれ変わったら虎か馬になりたいなあ＊」

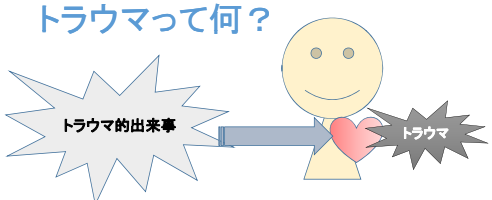
トラウマって何？

私たちの日常生活での“トラウマ”の使われ方

・「交通事故がトラウマになって、運転できなくなった」 ○
・「彼は異性に対してトラウマを持っている」 ？
・「あの人、夢の職業に就けなかったことがトラウマなんだって」 ？
・「生まれ変わったら虎か馬になりたいなあ＊」 ！？

【トラウマ（trauma）】
何らかの出来事によって引き起こされる心の傷のこと（心的外傷）。
医学的な治療を必要とする。

トラウマって何？



DSM IV-TRによる「トラウマ的出来事」の定義
①実際に、またはあやうく死にそうになる。あるいは重傷を負うような出来事で、身体の保全に迫る危険を体験し、目撃し、直面した場合
②その人の反応は、強い恐怖や無力感、戦慄に関するもの

つまり

生死にかかわるほどの出来事を体験し、恐怖する

トラウマが人にもたらす変化

考えられるトラウマ反応

・心理面
人生観が変わり、否定的な感情を持つようになる。無力感・罪悪感を持ちやすくなったり、情緒不安定に。

・身体面
心身症。不眠・食欲不振・動悸・体の痛み・手のふるえなど。

・社会生活面
本人が人づき合いを嫌がることや、周囲が態度を変えることによって人間関係に変化が出る

PTSDの症状（ASDの症状）

①再体験	• 思い出す、悪夢を見る
②回避・まひ	• 似た状況を避けようとする
③過覚醒	• 小さな物音に過敏に驚く

PTSDとASDの違い

【**PTSD**（Posttraumatic Stress Disorder）】心的外傷後ストレス障害

「再体験」、「回避・まひ」、「過覚醒」の症状が1ヶ月以上持続する。

【**ASD**（Acute Stress Disorder）】急性ストレス障害

「再体験」、「回避・まひ」、「過覚醒」の症状が最低2日間、最大1ヶ月間持続する。また、それがトラウマ的出来事の1ヶ月位内に起こっている。

PTSDとASDの違いは、症状の持続期間

PTSDになるきっかけと原因

きっかけ

① 予測できない突然の出来事

病気・死別・交通事故・自然災害（地震・台風など）etc.

② 悪意を持ってなされる行為

傷害・殺人・虐待・いじめ・家庭内暴力・強姦・強制わいせつ etc.

原因

脳の機能不全がPTSD症状に関係している？

（扁桃体の過剰活性、内側前頭前野の機能不全）

自然災害によるPTSD発生率

自然災害（震災など）によるPTSDの発症率は、3～5%

ex.)東日本大震災（2011年3月）

震度6弱以上の揺れを体験した人（被災者）は500万人以上

⇛15万人がPTSDになる恐れ

ex.)首都圏直下型地震（近い将来）

東京都と、東京に近い地域の人口3000万人

⇛90万人がPTSDになる恐れ

PTSDの治療

Q. トラウマの記憶は消せるか？

⇒ 消せない

Q.『回復』とは何か

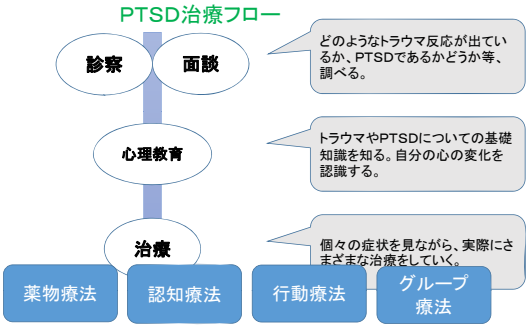
⇒「思い出すと悲しいのだけれどちょっと脳に置いておけるようになるプロセス」

Q. PTSDの治療のゴールは？

⇒ 生活をとりもどすこと（社会復帰）

PTSDの治療

PTSD治療フロー



7割は自己回復する!?

アメリカ疫学者ケスラーの調査（1995年）

「PTSDと診断された人は6年経つと3割ぐらいの人を残して7割は回復する。」

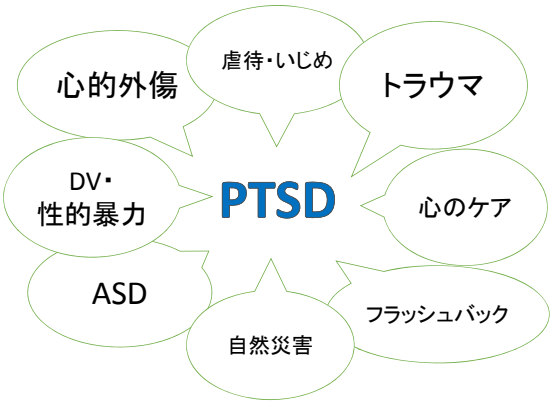
「そしてそれは治療を受けても受けなくても変わらない。」

⇛どう治療しても回復していけない人は存在する・・・

7割は自力で回復する

☆治療者・支援者の役割

回復を早める。自己回復の手助けをする。



参考文献

◆『PTSDとトラウマのすべてがわかる本』
飛鳥井 望〔監修〕(講談社)

◆『震災トラウマ』
和田 秀樹(ベストセラーズ)

◆『心のケア――阪神・淡路大震災から東北へ』
加藤 寛，最相 葉月(講談社)

児童虐待とPTSD

子どものPTSD

・1985年に子どものPTSDに関する最初の単行本が刊行されて以降、心的外傷に関する著作には子どもへの言及が次第増加するようになった。

・子どものPTSDに関する研究は米国を中心に発展している。

・日本では大型災害を契機として子どものPTSDに関心が向けられた。しかし、それゆえに個別災害（親の事故死、自宅の単独火災など）に由来する外傷後ストレスと、それに対する治療的介入の視点が乏しいとの見解もある。

・幼い時期にトラウマ刺激を体験した場合と、大人の場合では反応に違いが出てくる可能性がある。

・発達にも影響を与える可能性

児童虐待とは

・虐待の定義（児童虐待防止法第二条より）

「児童虐待」とは、保護者（親権を行う者、未成年後見人その他の者で、児童を現に監護するものをいう。以下同じ。）がその監護する児童（十八歳に満たない者をいう。以下同じ。）について行う次に掲げる行為をいう。

・虐待の種類

一、　身体的虐待

二、　性的虐待

三、　ネグレクト

四、　心理的虐待

虐待とトラウマ

虐待がトラウマになることは意外にも最近になって再発見された問題である。

＜特徴＞

・癒しの場の欠如

・トラウマの持続

・トラウマの精神発達への影響

複雑性PTSD

・複雑性PTSD（Complex Post-Traumatic Stress Disorder）とは、ジュディス・ハーマンによって提唱された概念である。

・災害、事故などのようにそのときだけ起こった事件、すなわち単一外傷体験から起こるPTSDではなく、何年にもわたって長く続いた虐待、暴行、拷問などを原因として起こる心的外傷の症状を複雑性PTSDと呼ぶ。

・複雑性PTSDは感情的なこと、そして対人関係の機能の多くの領域における慢性的な困難が特色である。

人的災害

・いじめ

・児童虐待

・性的被害

・ドメスティック・ヴァイオレンス

・人質

症状

・虐待による精神的な影響は基本的な自己感や他者との関係に重大な障害をもたらす可能性がある。

・長期的な影響として、行為障害、人格障害、解離性障害、食行動障害、薬物依存などの精神障害との関係が強いと言われている。

・PTSD概念は成人後の戦闘に参加した帰還兵の症状をベースとしているため、そこで述べられた症状以外のトラウマ反応が存在する可能性がある。ゆえにPTSDという症状が虐待によるトラウマを受けた子どもの状態を全て網羅しているわけではない。

虐待による影響/症状

	身体的虐待	性的虐待	ネグレクト	心理的虐待
発達への影響	外傷体験 信頼感の低下 暴力による解決方法の学習	外傷体験 身体への過度の関心 自己評価の低下(自分を汚いものと感じる)	愛着関係の欠乏 信頼感の欠乏 発達刺激、認知的刺激の欠乏	自己否定 信頼感の欠乏 善悪の混乱
精神症状	外傷による障害 記憶の問題 生理的防衛 心理的防衛 自己調整能力の低下 抑うつ感情 反社会的行為	外傷による障害 抑うつ感情 ファンタジー傾向(白昼夢、虚言) 不適切な性行動 自尊感情の低下	他者関係能力の障害 自己調節能力の低下 精神活動の低下 刺激防衛能力の障害 (自己治癒力の低下、易刺激性)	自己破壊的行動 抑うつ 他者との関係を結ぶことができない(孤立傾向) 攻撃性や激しい怒り

治療法

・安全で安定した生活

・トラウマへの治療

・集団療法

・権利教育

・虐待者への治療

・虐待家族への治療

理解

・虐待する親もトラウマを抱えた存在の場合もある。

・PTSDの症状に含まれていない症状もある。

・トラウマとなる刺激をどの年齢段階で経験したかによっても、その影響が変わってくる可能性がある。

・愛着対象から虐待を受けるという関係のなかでは、対人関係を結ぶ方法を身につけることは難しくなってしまう。第三者による犯罪被害や自然災害によるPTSDと、児童虐待による複雑性PTSDの違う。

参考資料

総編集:松下正明(2000年)『臨床精神医学講座　S6巻　外傷後ストレス障害(PTSD)』 株式会社　中山書店

久留一郎(2003年)『PTSDーポスト・トラウマティック・カウンセリング』株式会社駿河台出版社

http://www.just.or.jp/?terminology=000884

複雑性PTSD | JUST | NPO法人 日本トラウマ・サバイバーズ・ユニオン

http://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%A4%87%E9%9B%91%E6%80%A7PTSD

複雑性PTSD - Wikipedia

LD～学習障害～

LD、学習障害ってなに？

学習障害の定義

・基本的には全般的な知的発達に遅れはないが、聞く、話す、読む、書く、計算する又は推論する能力のうち特定のものの習得と使用に著しい困難を示す様々な状態を指すものである。

（文科省）

何故 学習障害が発生するのか

- 完全にはわかっていないが、中枢神経系のはたらきに何らかの機能障害があると推定されている
- 視覚障害、聴覚障害、知的障害、情緒障害などの障害や、環境的な要因は直接の原因ではない

学習障害の症状（例１）

- 教科書がうまく読めない
- ・文字や行を読み飛ばしてしまう
- ・漢字の音読み、訓読みが区別できない
- ・似た音の発音ができない
- うまく話せない
- ・筋道を立てて話せない（思いつくまま話す）
- ・文章でなく単語ばかりになってしまう
- ・話をまとめられず途中で黙ってしまう

学習障害の症状（例２）

- 身体を使うことが苦手
- ・漢字をマスに収まるよう書けない
- ・縄跳びができない
- グループ行動が苦手
- ・話し合いの途中なのに他のものに興味を示し席を立ってしまう
- ・あまり話さず、行動がゆっくり

学習障害による困難

- 会話やコミュニケーションがうまくいかない
  - ・グループの輪に入れない
  - ・忘れ物が頻繁にある
  - ・授業を意図的ではないが妨害してしまう
  - ・頻繁に友達ともめてしまう

学習障害に似た障害

- ADHD
- 知的障害
- 自閉症
- アスペルガー症候群
- 吃音
- 構音障害

- 一部のものは併発することもある

LDに気付く

- 幼児期
  - ・話し始めるのが遅い
  - ・3、4歳の成長期なのに無口でおとなしい
- 学校
  - ・先生の話をちゃんと聞いているのにテストの結果が良くない
  - ・音読がうまくできない
  - ・板書がうまくできない

学習障害は改善する？

- 中枢神経系のはたらきの異常であると推測されており、改善することはない

- 学習障害への理解と支援があれば問題なくすごすことができる

学習障害は支援を必要とする個性！

学習障害のある子への接し方

- 必要以上に甘やかさない
- 他の子とむやみに比べない
- 無理強いさせない
- 指示や話はわかりやすく、具体的に伝える
- その子の「やり方」を重視する
- その子の話を聞く

学習障害への支援

- 教育的支援
  - ・各地域の教育委員会の専門家チーム
- 就労支援
  - ・自立訓練、就労移行訓練、就労継続訓練
  - ・助成金制度
- 障害者手帳

おしまいに…

参考資料

- 厚生労働省HP
- 主婦の友社　宮本信也監修　平成21年
  『じょうずなつきあい方がわかるLD学習障害の本』
- きょうせい　文部科学省著　平成14年
  『学習障害（LD）への教育的支援』
- 明治図書出版　森孝一 著　2001年
  『LD・ADHD特別支援マニュアル』

「いじめ」の理解と誤解

本当に「深刻化している」「自殺の原因」「あってはならない行為」なのか？

川北　稔（教職実践講座）

1.　繰り返される「いじめ」の社会問題化

2012 年以降、大津市の「いじめ自殺」事件報道をきっかけに再度いじめが社会問題となった。既に知られているように、「いじめ」は数年に一度社会問題となり、洪水のような報道が行われては、再度話題にならなくなるパターンが繰り返されている。2013 年には「いじめ防止対策推進法」も施行されたが、今後、実効力のある「いじめ」対策は可能になるだろうか。

「いじめ」が問題であることに反対する人は少ない。だが実は「いじめ」によって何をイメージするかは人によりさまざまである。対処すべき問題に共通の理解がなければ、解決に至ることも難しいだろう。今回は、「いじめ」への対応の前に、どのように理解するかという課題について考えたい。特に、しばしば陥りやすい誤解について検討する。

2.　3 つの誤解から考える

2.1　いじめは深刻化している？

「いじめ」報道には過去に 4 回のピークがある（1986 年、1996 年、2006 年、そして 2012 年）。いずれも「自殺」事件の大きな報道をきっかけとして、新聞やテレビで毎日のように報道されるパターンである。文部科学省の「いじめ」統計は報道を後追いするように定義の変更、再調査を行っている。再調査は以前よりも丁寧に件数を拾い上げるようになるため、報道件数を追いかけるように、統計的な「いじめ」の件数が増えることになる。2012 年の緊急調査で「いじめ」認知件数は、小学校 88,132 件（愛知県 4,542 件）、中学校 42,751 件（同 2,811 件）であった。図 1 では、報道量を折れ線グラフ、統計調査のいじめの件数を棒グラフで示している。

しかし、この統計調査によって実際の「いじめ」の増減が示されていると考える人はほとんどいないだろう。「いじめが年間に 13 万件」と聞くと深刻な問題のように思われるが、数え方によって件数は大きく変わってしまうのである。都道府県ごとに件数を見直すと、県によって数十倍もの件数の開きがあることが知られている。

このように報道のたびに調査をやり直すのではなく、継続的に小中学生を追跡した調査も行われている。国立教育政策研究所の追跡調査（生徒指導・進路指導研究センター 2013）は、小学生 4 年生から中学生 3 年生までを対象に、2004 年から 2012 年まで各年のいじめ被害・加害経験を尋ねている。各年において被害や加害の経験率の推移を知ることができるだけでなく、同じ集団に対する追跡調査を行っていることが特徴である。たとえば小学校 4 年生の集団が、6 年生になるまでに、被害や加害経験をどう変化させているかが分かる。

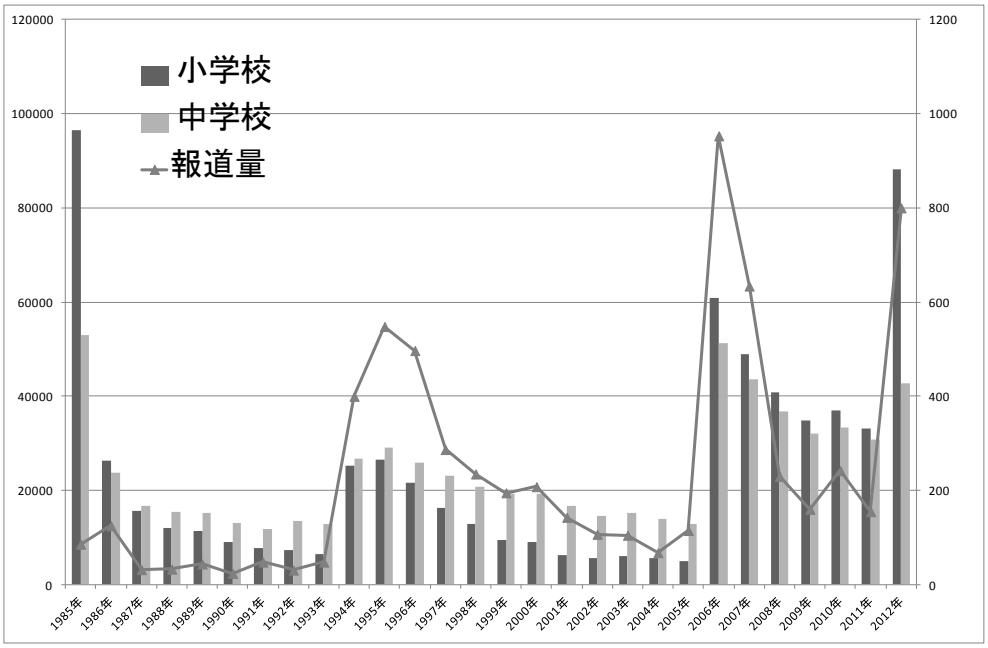
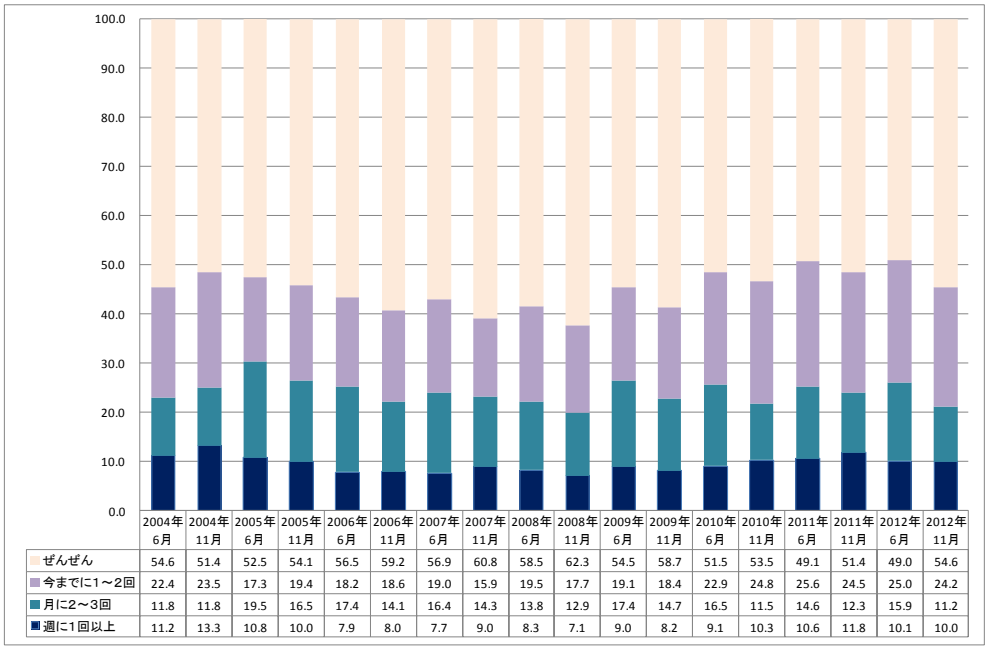


図 1　いじめの認知件数（小中学校）と報道量：文部科学省「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」から作成。2012 年のみ「いじめの問題に関する児童生徒の実態把握並びに教育委員会及び学校の取組状況に係る緊急調査」から（期間は 2012 年度当初から 9 月まで）。報道量（右目盛り）は、朝日新聞での「いじめ」を本文に含む記事量（「聞蔵Ⅱ」による検索）。

図 2 では、小学生の 4 年生から 6 年生までの男子の被害経験に関するデータを挙げた。被害の経験は、9 年間で大きな変化は見られない。つまり、いじめの流行やピークというものが目立った形で存在しないことが、このデータから確かめられる。大きな社会問題になった 2006 年や 2012 年も、特に大きな変化はない。「いじめ」はいつでも同じように起こっていると考えるほうが実態に近いようだ。



	2004年6月	2004年11月	2005年6月	2005年11月	2006年6月	2006年11月	2007年6月	2007年11月	2008年6月	2008年11月	2009年6月	2009年11月	2010年6月	2010年11月	2011年6月	2011年11月	2012年6月	2012年11月
ぜんぜん	54.6	51.4	52.5	54.1	56.5	59.2	56.9	60.8	58.5	62.3	54.5	58.7	51.5	53.5	49.1	51.4	49.0	54.6
今までに1～2回	22.4	23.5	17.3	19.4	18.2	18.6	19.0	15.9	19.5	17.7	19.1	18.4	22.9	24.8	25.6	24.5	25.0	24.2
月に2～3回	11.8	11.8	19.5	16.5	17.4	14.1	16.4	14.3	13.8	12.9	17.4	14.7	16.5	11.5	14.6	12.3	15.9	11.2
週に1回以上	11.2	13.3	10.8	10.0	7.9	8.0	7.7	9.0	8.3	7.1	9.0	8.2	9.1	10.3	10.6	11.8	10.1	10.0

図 2　小学校 4 年生から 6 年生（男子）の「いじめ」経験率（仲間はずれ・無視・陰口）：

生徒指導・進路指導研究センター（2013）

2.2 「いじめ」は自殺の原因？

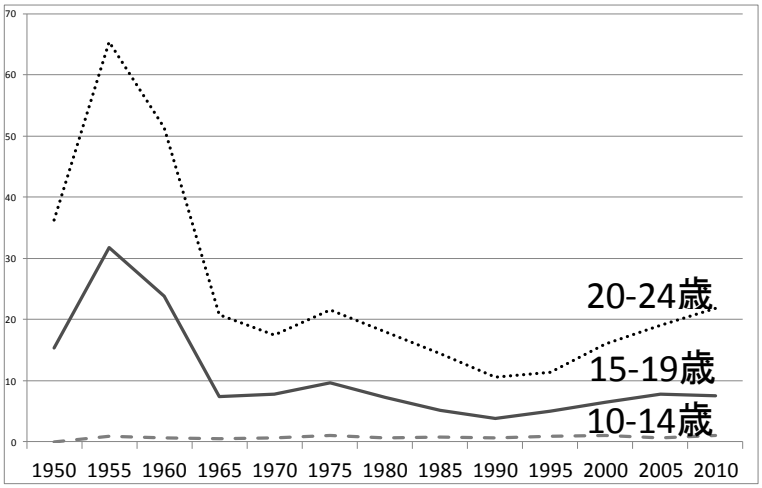


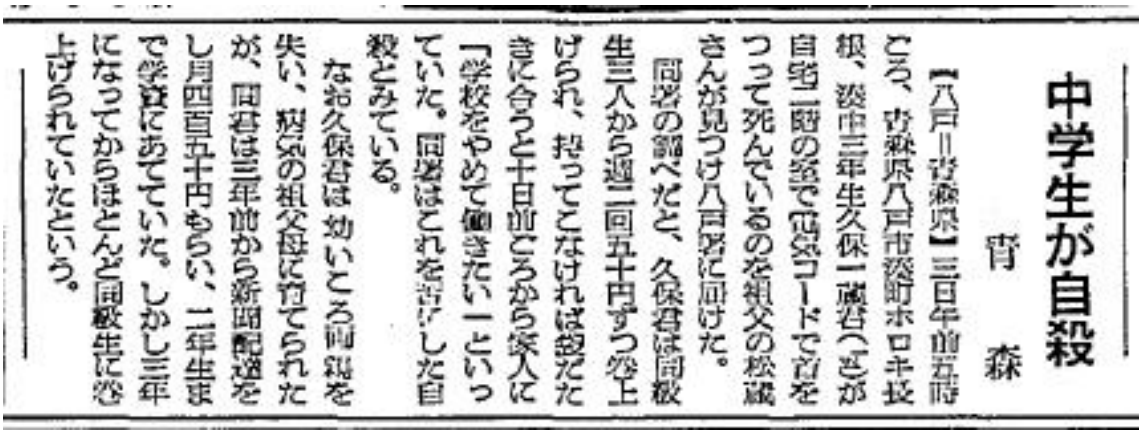
図 3　人口 10 万人当たりの自殺による死亡者数の推移
：厚生労働省「人口動態統計」平成 23 年より

いじめ自殺のセンセーショナルな報道によって「子どもの自殺が増えている」と思う人がいるかもしれない。中には、現在と比較して昔は「めったに自殺する子どもなどいなかった」「昔はいじめはあったが、被害者が自殺するほどひどいことはしなかった」と考える人もいる。

実際はどうだろうか？　長期的な自殺の統計についてみれば、特に現在急な増加が見られるわけではない（図 3）。元々10 代の自殺は少ない。その一方で、20 代の自殺はかつてかなり多い時期があったことが確認できる。また、1990 年代以降はふたたび増える傾向にある。心配しなくてはいけないのは、どちらかといえば 20 代のようだ。

昔はいじめで自殺する子どもがいなかったというのも本当ではない。ほんの一例だが、新聞記事（図 3）を見てみよう。中学生が新聞配達でもらったお金を同級生に巻き上げられ、それを苦にして自殺したことが読み取れる。だが「いじめ」や「いじめ自殺」というキーワードで報じられているわけではない。日本で最初の「いじめ自殺」は 1970 年末（あるいは 1980 年代半ば）のものだというのが通説だが、それまでも同様の事件は起こっていた。ただ「いじめ自殺」というように、両者をセットにして考える習慣がなかったのである。

自殺には非常に多様で複雑な背景があるが、しばしば単純化して解釈されやすい。伊藤（2013）によれば、子どもの自殺は大きく分けて「受験苦」「いじめ」のどちらかが「原因」だと理解されてきた。かつては自殺があるたびに受験のプレッシャーや失敗が理由だとされ、受験の圧力が少なくなった近年は「子どもの自殺＝いじめ」という枠組みにあてはめて事件が解読される。「いじめ被害者の自殺」という物語に合致するような事件はしばらく熱心に報道されるが、単純な物語で解釈できない事件は短期間で TV の画面や新聞紙面から姿を消していくという。



中学生が自殺

青森

【八戸＝青森県】三日午前五時ごろ、青森県八戸市湊町ホロキ長根、湊中三年生久保一誠君（一三）が自宅二階の室で電気コードで首をつって死んでいるのを祖父の松蔵さんが見つけ八戸署に届けた。

同署の調べだと、久保君は同級生三人から週二回五十円ずつ巻上げられ、持ってこなければなぐたきに合うと十日前ごろから家人に「学校をやめて働きたい」といっていた。同署はこれを苦にした自殺とみている。

なお久保君は幼いころ両親を失い、病気の祖父母に育てられたが、同君は三年前から新聞配達をし月四百五十円もらい、二年生まで学資にあてていた。しかし三年になってからほとんど同級生に巻上げられていたという。

図３　1963 年の中学生の自殺報道：『朝日新聞』1963 年 5 月 3 日夕刊より

このように「いじめ自殺」というキーワードが過度に注目されることにより、いじめと自殺に関する理解がかえって進まなくなっている可能性がある。自殺に関しては、死の直前に高い割合で「うつ」などの症状がみられることが知られている。そのような精神症状を持つ人には、メンタルヘルスの知識に基づく対応も必要になる。通常の判断力を持つ相手にするように「死んではいけない」などと説得することは、逆に自殺の選択肢を強調してしまうことになりかねない。

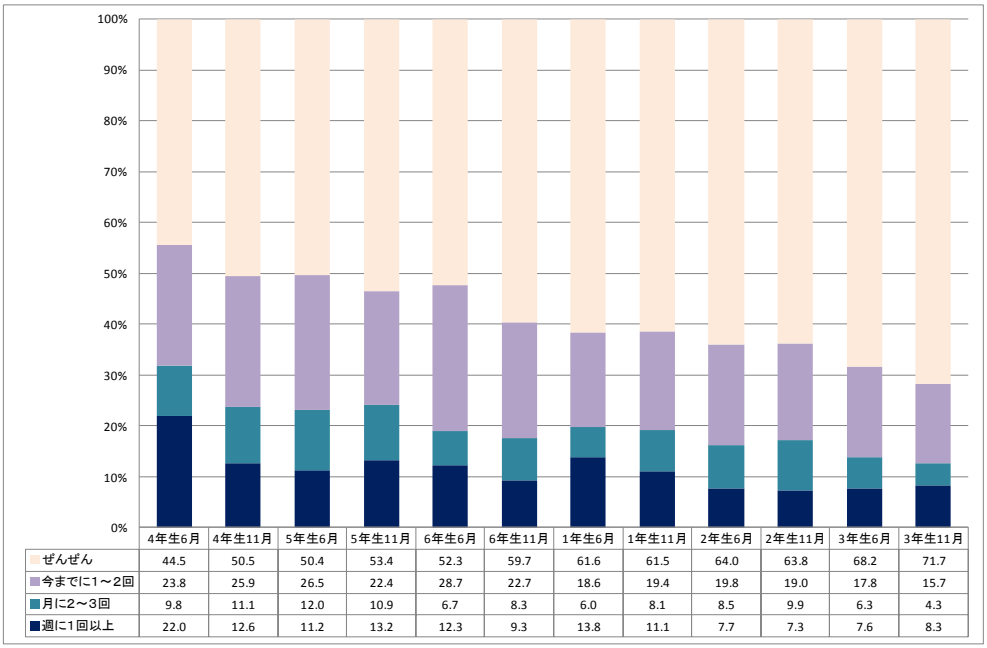
また、当たり前だが「いじめ」は自殺に結び付くものばかりではない。次の節で見るが、「いじめ」自体は非常にありふれた行為なのである。被害を受ける子どもも最初から自殺を考えているわけではない。それに対し、メディアで伝えられる「生きていればいいことがある」などのメッセージは、現実の「いじめ」像とずれていないだろうか。自殺を考えるよりも手前に、様々な解決策があることこそ、報道して共有したい。

2.3　「あってはならない」「許されない」いじめ？

いじめ自殺の報道は、「あってはならない」「絶対許されない」いじめを強調する。日常の、もっと見えにくいトラブル（加害・被害関係が曖昧）とのギャップが生じている。報道される「いじめ自殺」は、何の落度もない被害者が、まるで悪魔のような加害者にいじめられているようにも感じられる。だから、「なぜそのような行為を放っておいたのか」という怒りの感情も呼び起こす。だが、本当に「いじめ」はそんなに分かりやすい「加害・被害」の関係で起こっているのだろうか。

文部科学省による「いじめ」の定義は、「被害者重視型」に度々改変されている（被害者がそう思ったら「いじめ」であるという考え方）。では、周囲を含めて何を「いじめ」と思えばいいのか、どう「いじめ」に気づいてブレーキをかければよいだろうか。

先ほど紹介した国立教育政策研究所は、毎年の「いじめ」経験率だけでなく、同じ小学生や中学生が 3 年間にどのように「いじめ」経験を変化させているのかという追跡調査をおこなっている。つまり、2010 年から 2012 年までの小学校 4 年生から 6 年生、中学校 1 年生から 3 年生が、どのように経験を変化させているかが分かる。



	4年生6月	4年生11月	5年生6月	5年生11月	6年生6月	6年生11月	1年生6月	1年生11月	2年生6月	2年生11月	3年生6月	3年生11月
ぜんぜん	44.5	50.5	50.4	53.4	52.3	59.7	61.6	61.5	64.0	63.8	68.2	71.7
今までに1～2回	23.8	25.9	26.5	22.4	28.7	22.7	18.6	19.4	19.8	19.0	17.8	15.7
月に2～3回	9.8	11.1	12.0	10.9	6.7	8.3	6.0	8.1	8.5	9.9	6.3	4.3
週に1回以上	22.0	12.6	11.2	13.2	12.3	9.3	13.8	11.1	7.7	7.3	7.6	8.3

図 4　小学生と中学生の「いじめ」被害経験率の推移（仲間はずれ・無視・陰口）：生徒指導・進路指導研究センター（2013）

図 4 では、便宜的に小学校 4 年生から中学校 3 年生まで、6 学年の推移が分かるグラフを作成した（同じ小学生が中学生になるまでの推移を扱っているわけではないことに注意）。このように比較すると、いじめの被害率は 6 年間で緩やかに少なくなっていることが大まかには確認できる。

ところで、いじめの被害や加害を経験する子どもは、短期間のうちに入れ替わることが知られている。たとえば小学校 4 年生から 3 年間の追跡調査を見ることにする。3 年間の 6 回の調査のうち、「一度も被害（加害）経験がなかった」と答えた子ども、「数回（1 回から 5 回）経験した」と答えた子ども、「6 回すべてについて経験した」と答えた子どもの 3 種類がいることになる。

図 5 は、いじめの被害と加害の経験率を、3 年間 6 回に及ぶ調査で「全くない」「何度かある」「6 回すべてある」という 3 種類に分けたものである。これを見ると、被害と加害についても経験が全くないという人は少なく、多くは何らかの時期に「いじめ」を経験していることが分かる。データは省略するが、子どもの間での入れ替わりも激しい。つまり、子どもの間では加害や被害がそれほどありふれていて、まただれが加害者や被害者になるのかは決まっていないということだ。

「深刻ないじめ」の報道にともない、「いじめはあってはならない」という声や、「いじめ根絶」「撲滅」といった言葉も聞かれる。また、「すべてのいじめを犯罪として扱うべきだ」という意見もある。ただ、「いじめ」にはこれほど日常的にありふれた行為まで含むことを考えると、各人がどのような「いじめ」をターゲットに議論をしているのか、いま一度確認したほうがよいように思われる。

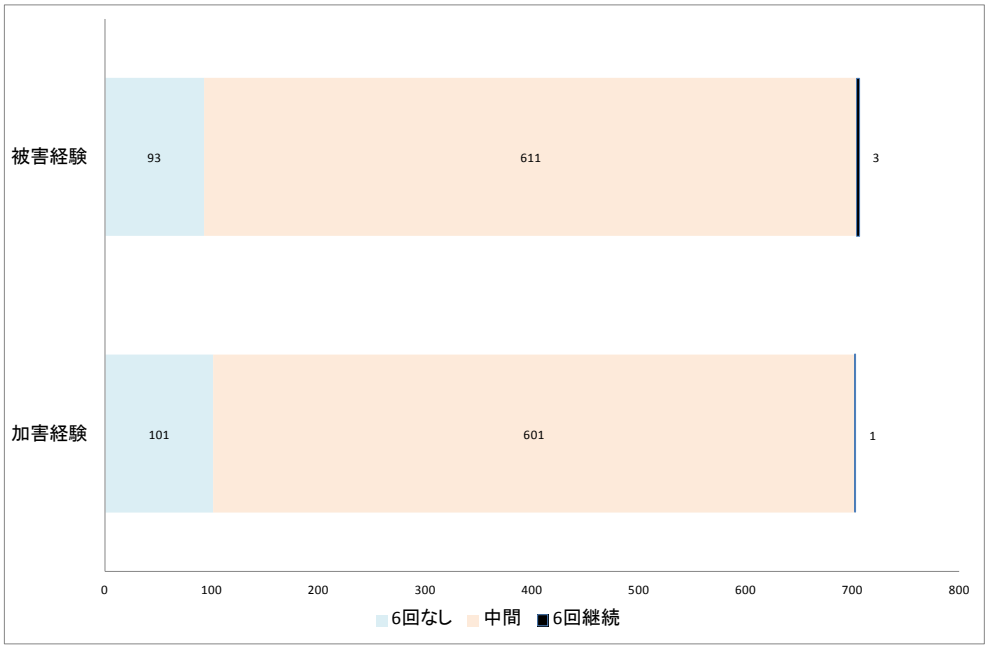


図 5　小学校 4 年生から 6 年生（男子）のいじめ被害・加害経験の分類：生徒指導・進路指導研究センター（2013）

3.　おわりに

今回は、いじめの理解に伴って陥りやすい誤りについて、データを参考に考えてきた。直接いじめの対処に役立つ情報を提供できたわけではないが、「いじめ」そのものをどのようにイメージするか自体に大きなズレが生まれやすく、有効な対処がおこなわれにくいことが明らかになったのではないかと考える。

まず「深刻化」「自殺の原因」「あってはならない」といった理解は、報道されるような「深刻ないじめ」を前提に考えるため、かえって日常の「いじめ」に気づくことを難しくする。分かりやすい「加害」を突き止めるような「いじめ」対策ではなく、「いじめ」が子どもの日常と隣り合わせであり、学校におけるさまざまな活動が「いじめ」を予防する、あるいは増幅する契機であることに理解が進むことを期待したい。

また「いじめ」が子どもの変化にかかわる問題だという誤解も根強い。報道は「新奇性」に価値を置くため、ニュース報道は「昔とは違う」という意味付けを伴う。それが「昔の子どもはこんなことはしなかった」という誤解につながる。しかし「いじめ」はいつでも、どの子にも起こりうる。加えて、思春期の特定の時期に被害・加害リスクが高いこともっと知られてよいだろう。それに対し、「大人の格差社会の反映」「ゆとり教育の影響」など、安易に社会の変化と結びつけた「いじめ原因論」の根拠は乏しい。

報道の洪水や社会背景論などに遠回りをせずに、私たちはどれだけ「いじめ」の日常を理解できているだろうか。誤解を越えた、より積極的な「いじめ」理解の手だてについても、機会を改めて論じたい。

文献

伊藤茂樹（2013）「子どもの自殺を消費する社会」『現代思想』2013 年 5 月号。

生徒指導・進路指導研究センター（2013）『いじめ追跡調査 2010-2012』国立教育政策研究所。

「いじめを忘れた大人」と「子ども」のあいだで――2012 年度・13 年度を振り返る

川北　稔（教職実践講座）

2012 年度は数年ぶりに「いじめ」が大きなニュースになった。深刻な「いじめ自殺」事件報道をきっかけに、あたかも「いじめ」ブームのような状況になったことは過去数回ある。それだけでなく、2013 年に「いじめ防止対策推進法」が公布・施行されたのは新しい動きといえる。

現在のいじめ理解の問題点について、詳しくは資料を参照されたいが、深刻ないじめ事件だけを集中的に報道することで、「いじめ」のイメージは実情とかけ離れていってしまいがちである。「加害・被害がはっきりしており、加害者が 100%悪い」「絶対にあってはならない（根絶を目指すべき）」など、極論に近い意見も出てきやすい。実際に小中学生を追跡した調査では、3 年間の間に「いじめ」行為の被害や加害も経験しなかった子どもは約 1～2 割しかいなかった（国立教育政策研究所による追跡調査）。「あってはならない」ではなく「起こるのが当たり前」「どこにでもある」という感覚を出発点にしたほうがいいようだ。

大人は次の報道ブームが起こるまで、また「いじめ」を忘れることになるのだろうか。あるいは道徳の教科化などの議論も進行中だが、上のような調査を踏まえた対策になっているだろうか。また実際に学校現場で取り組まれている対策も、「いじめ像」が偏っている段階では的確に評価されにくいだろう。

「いじめ」が日常に「ある」という子どもの感覚を、私たちは大人になる途中で忘れてしまうのかもしれない。「いじめは現代社会の病理を反映している」「いや、いじめはどんな社会からもなくならない」といった議論は脇に置き、子どもには子どもの社会があり、「いじめ」を起こす独特の条件がそろっていることを認識したい。2013 年出に版された『教室内（スクール）カースト』（鈴木翔著、光文社新書）は、学校内に存在する「身分の格差」について回想する大学生のインタビューなどをもとにした研究である。同書は、成長期の子どもが友だちのあいだで居場所や承認を求める気持ちが、時に残酷な序列や排除に結び付くことを思い出させてくれる。それは、大人になって個人が多様な居場所を得られるようにつれて「どうしてあれほどこだわっていたんだろう？」と不思議になる気持ちのように思う。

大学生という立場は、子ども独特の社会について良く覚えているのと同時に、子どもと違って冷静に言葉にすることができる貴重な時期かもしれない。SOBA が大学生ならではの語りの場であり、また発信する場であることをこれからも期待したい。

SOBA 活動報告書　第 10・11 号

編集・発行　愛知教育大学教育学部附属教育臨床総合センター
〒448-8542　愛知県刈谷市井ヶ谷町広沢 1 番地
SOBA 連絡先
FAX　0566-26-2713
E メールアドレス　empower@m.auecc.aichi-edu.ac.jp

発行責任者　愛知教育大学　教職実践講座　川北　稔
SOBA 代表　濱田　奈歩

表紙絵　海野　由希子
伊藤　梨香

発行　2014 年 3 月